



日本体育学会第 62 回大会
体育社会学専門分科会シンポジウム

採 録

スポーツの社会的役割と可能性の再考：
スポーツによる復興支援の中で

日時 2011 年 9 月 26 日（月） 9:30～12:00

会場 国立大学法人 鹿屋体育大学 205 教室

主催 体育社会学専門分科会研究委員会



内 容

演者・指定討論者・司会の紹介	1
開会あいさつ 北村尚浩	2
趣旨説明 長ヶ原誠	2
発表1 「教育機関・ボランティア組織の視点から」 仲野隆士	4
発表2 「地域スポーツの視点から」 黒須充	9
発表3 「アスリートによる社会貢献の視点から」 間野義之	14
指定討論1 山本浩	18
指定討論2 成田真由美	23
質疑応答	25
資料	31
あとがき 長ヶ原誠・北村尚浩	53

■ 演者（発表順）

仲野隆士氏（仙台大学）

「教育機関・ボランティア組織の視点から」

黒須充氏（福島大学）

「地域スポーツの視点から」

間野義之氏（早稲田大学）

「アスリートによる社会貢献の視点から」



■ 指定討論者

山本浩氏（法政大学、元 NHK エグゼクティブプロデューサー）

成田真由美氏（日本テレビ放送網株式会社、パラリンピック水泳選手）



■ 司会

長ヶ原誠氏（神戸大学）

北村尚浩氏（鹿屋体育大学）



＜開会あいさつ・趣旨説明＞

北村氏：

体育社会学専門分科会シンポジウム「スポーツの社会的役割と可能性の再考 スポーツによる復興支援の中で」を開催させていただきます。このシンポジウムの司会は、神戸大学の長ヶ原誠先生、それから私、鹿屋体育大学の北村でございます。まず、はじめに長ヶ原先生の方からこのシンポジウムの趣旨説明とパネリスト並びに指定コメンテーターの先生方の紹介をさせていただきます。

長ヶ原氏：

神戸大学の長ヶ原と申します。朝早くからお集まりいただきましてありがとうございます。今回の体育社会学分科会シンポジウムは「スポーツの持っている社会的価値と可能性の再考：スポーツによる復興支援の中で」というテーマで行なわせていただきます。今年、3月11日におこりました、東日本大震災ほどの先進国もまだ経験したことのない甚大な被害をわが国にもたらしました。さらに原発事故、それにとまなう風評被害等その影響は計り知れないところであります。そして、今回の大震災は被災地域だけではなく日本の経済産業文化、国民生活全体にも深刻な影響を与えておりますが、我が国のスポーツに対する影響も例外ではありません。たとえば、被災地における人々の生活の中のスポーツ活動が失われ、スポーツの地盤、資源がおおきなダメージを受けたり、スポーツ大会のプログラムの中止、興行的なスポーツ活動が中止になったりしました。そういう中でもスポーツの力が発揮されました。ここに例をあげてみますけれども、被災地でのスポーツ関係、団体、個人による救援活動と復旧支援、既存の地域スポーツ資源を活用した支援、国内外におけるチャリティイベントの開催、アスリートによる義援金寄付、募金活動、スポーツに関

わる振興組織や産業団体などの物資提供や財政資源、被災者に対する直接的なスポーツ活動の機会や経験を提供するボランティア支援、被災地に元気や勇気や希望、夢を送りたいという言葉で半年で非常に多く聞きましたけれども、このような心理的感情的支援を含めた様々な支援活動が現在進行形で展開されているといえるわけです。我々は、これまで言われ続けてきたスポーツの持つ力を再認識しながら、新たなスポーツの可能性について、自問自答を続けてきた半年ではなかったかなという風に思います。スポーツによって何ができたのか、スポーツによって今後何ができるのか、これらはここにおられる皆様が共通して関心を持たれているテーマではないかと思いますが、この会では実際に復興支援に携わるパネリストの方々のご報告をもとにコメンテーターの方々、ここにいるパネリストと一緒に我が国のスポーツ振興に向けての新たな示唆や、そのための課題についても掘り下げていけたらと思います。

では、情報を提供してくださるパネリストの方々を本日お話しされる順番に紹介させていただきます。左の方から、まずは仙台大学の仲野隆士先生にご登壇いただきます。仲野先生は自らが被災者でもありまして、その大変な状況の中で、仙台大学の学生や地元のレクリエーション団体と一緒になりまして、被災者救援活動、復旧作業のボランティアを行ってこられました。被災地の実状とご自分の活動内容をご紹介していただくと同時に教育機関とボランティア組織という視点からスポーツを通じた復旧復興支援のお話をしていただこうと思います。お二方目は、福島大学の黒須充先生にお願いしております。黒須先生はご存知の通り、我が国における総合型地域スポーツクラブの提唱者でもありますし、それを全国に普及させた立役者でもあります。黒須先生もご自身、被災地の中で大変な苦労をなされてますが、今回の震災の中で総合型

地域スポーツクラブが行なってきました、原発事故の避難者支援活動を含む被災者の支援活動のいろんな取り組みの事例を紹介していただきながらスポーツによる復興支援の可能性、今後の課題についてお話していただこうと思います。そして最後は早稲田大学の間野義之先生です。アスリートによる社会貢献という視点から情報を提供していただきます。間野先生はトップアスリートや指導者によるNPOを集結させて、一般社団法人「日本アスリート会議」という組織をこの4月に発足させてその代表理事を務めてらっしゃいます。震災直後、スポーツ界で何ができるのかという思いを即、実行に移された。その組織ではすでに「ウォームアップジャパン」という復興プロジェクトをスタートしておりますので今回はその内容を中心にお話ししていただこうと思います。本シンポジウムではお二方にコメンテーターとしてお越しいただいております。御一方目は、山本浩先生です。あえて、ご紹介する必要はありませんけれども、NHKの御勤めの後、現在、法政大学で教鞭をとっておられまして、日本のスポーツ全般について多方面でご活躍されていらっしゃいます。NHKの初任地が福島であったということで被災地に足をお運びになっておられますが、パネリストの先生方へのご質問とともに広い視野からスポーツによる復興支援の在り方について、ご意見をいただこうと思います。もう御一方は、日本テレビの成田真由美先生です。ご存知の通り、水泳選手としてアトランタから北京までパラリンピック四大会連続出場果たされまして、金メダル15個を含む計20個を獲得されているのと同時に、障害スポーツの普及・振興活動にも尽力されておられます。今回は、アスリートの社会貢献について、アスリートの立場から質問やコメントを頂戴できればと思います。本日全体の流れとしましては、パネリストの先生からの発表の後、コメンテーターのお二人から質問をいただきま

して、そのあと、フロアの皆様からもパネリストの先生方への質問を頂戴しますので、その中でいろんな意見交換を交えて、このテーマについて追及していきたいと思います。よろしく願いいたします。では、最初の演者であります、仲野隆士先生から教育機関・ボランティア組織の視点からということでお話をいただきます。仲野先生よろしく願いいたします。

<仲野氏発表>

仲野氏：

まず、トップバッターということで仙台大学の仲野が発表させていただきたいと思います。3月11日に東日本大震災が起きました。その日、私は午前中大学で入試業務があり、受験生が帰った後にそれが来まして、ある意味でほっとした記憶があります。その後、多くの方から大学・私個人にも安否の連絡や、励ましのメールとか暖かい励ましをいただきました。この場を借りて御礼申し上げたいと思います。私からは、教育機関・ボランティア組織の視点からというテーマでお話をさせていただきます。まずはトップバッターということもありますので、東日本大震災の基本情報ということでもう一度、レビューをしていきたいと思います。また、今回、発表するスライドは仙台大学が蓄積してきたデータあるいは、さらに付け加えたものをご報告いたします。

最初に基本情報ということですが、皆さんもご存じだと思いますが、3月11日の午後2時46分に地震が発生、震源は三陸沖でした。岩手県沖から茨城県沖までの500kmにわたって連鎖的に多くの地震が発生しました。震源の深さは24km、モーメントマグニチュードは9.0というのが最終的な報告でありました。特に大きな震度があったのは宮城県栗原で震度7ということです。北アメリカプレートとその下に沈み込んで、太平洋プレートの間におきた海溝型の地震ということがまず基本情報としてございます。その次ですが、発生から30分の間どの程度ずれが生じたかという、左が水平方向、右が垂直方向の図で、東南東の方向に約24メートルさらに、50メートル移動したようです。海底では上方向に約3メートルの移動がみられました。そのような、大きなずれが生じたわけです。それに伴って大きな津波が発生しました。この津

波がなければ被害は本当に少なかったと思いますが、この津波によって多くの方が犠牲になったということです。その次ですが、ここにもありますように日本列島は海の中にある島国という認識が正しいと思いますので、日本人は本来海とともに生きていくものだと思います。今回は、東北地方での地震がありました。今後は関東であるとか東海、あるいは四国沖で起こるかもしれませんし、これは日本どこでも起こってもおかしくはないということで、今回の一連の動きというのは、是非後世にも伝えていくべきだと思っています。津波の高さであるとか、川からどれほど遡上したとかの情報はここに乘っております。一番下には、津波による浸水した面積は400キロ平方メートルとの情報がまとめられています。ここからは、特に私たちが注目していた女川と石巻というところの航空写真をお見せします。上が2010年6月で右下が2011年の震災後ということです。震災後を見ていただいたらわかるように、がれきが撤去された更地の状態で、現場に行くとき少し上り坂のようになっているのですが、あたかもこれから分譲する宅地のような何もない状況でした。こういうところに行くと、言葉を失うというのがよくわかりました。同じように、これも6月に実際に現場に行って撮った写真ですが、女川の被災状況に関して本当に大きな津波が来たということがお分かりだと思います。このような状況が女川の港で起こったということです。次に、TVのニュースなんかでも出たりしましたが、これは警察署だったと思います。地盤が緩いということで柱を埋めていたんですが、それが液状化で抜けてしまったということも実際に見てきまして、すごいもんだなという実感を持ちました。一方、これは石巻ですが女川と同じように震災前後の比較をすると、かなり似ている状況が見て取れるかと思っています。こちらもある石巻ですが、この小さくて丸いのが、石ノ森 章太郎、石ノ

森漫画記念館で、これは奇跡的に建物だけ残りました。多分、円形の形状だったので残ったようです。その他は何も残らなかったという状況でした。

次に、新聞等に出た情報です。それによりますと、9月11日現在の警察庁および各県のまとめで死者・行方不明者、家屋の全壊半壊などの情報、あとは道路が崩壊したのがどの程度だったかがわかります。これを見ていただければ宮城県が突出して大きな被害を受けているという状況が見て取れるかと思えます。特に宮城、福島、岩手の3県が大きな被害を受けたということがわかります。次に、3県の亡くなった方々の年齢別の内訳をみますと60歳以上の方々が3分の2ということで、高齢の方々の命が奪われたという震災であったということです。それぞれの年代の内訳ですが、60代、70代が一番多くなっています。高齢者の方々は津波が来たときに逃げ遅れて、体力的にもかなり厳しい状況に追い込まれたのだらうと思います。次ですが、亡くなられた原因に関しては、阪神淡路大震災の時とはまったく違います。阪神淡路大震災の死者の8割の方々が家屋の倒壊などの圧死であったのに対し、今回の東日本大震災の場合は、水死が9割を超えています。つまり津波によって亡くなられた方が圧倒的に多かったということでした。本学の学生も3人亡くなりましたが、同じく水死で亡くなったということです。最後に、宮城県は死者も多く避難している方も多いのに対し、福島県はあまり多くの方が亡くなられてはいないのですが、避難者がこんなにいるということは、存知の通り、原発の影響で非難を余儀なくされた方が非常に多かったということがこの図を見ておわかりになると思います。このようなことから、1000年に一度起こるといわれている巨大地震によって、このような大きな被害があったということをご認識いただけたと思います。

ここからが本題に入っていくのですが、私

は今回の震災のボランティア支援ということで半年間、色々関わってきましたが、大事なことは地元の教育機関、あるいは地元のボランティア組織がまずは立ち上がらなくちゃいけないと。そのことを強く感じました。実際、本当に様々な組織団体がNPO、NGOを問わず国内外から支援に来てくださいました。内容も多岐にわたりまして、医療から福祉、遊び支援、心のケア、スポーツの支援、様々な団体がいろいろな形でサポートに入っていました。それはそれとし、何よりもまずは地元が立ち上がらなければならないと強く認識しております。特に、今回の地震ほど「大学」という存在価値が大きく浮き彫りになったことが過去にはないと思います。大学というものは専門的に学生を教育していますし、それぞれの大学の機能、学部の独自性などがいざというときに貢献しうるのではないかと考えております。いくつか貢献すべき理由を考えてみました。①その土地・地域の人たちの気質、言葉遣いなどがわかります。なぜ気質を入れたかという、東北人氣質というものがどうもありそうだからです。私はもともと大阪で生まれた人間なので、関西人氣質とは全く違う気質というものを東北の方々に非常に強く感じました。というのは東北の人たちは我慢強い。苦しみとか、悲しみとかを耐え忍ぶ。そういう我慢強さは他にはないかもしれません。逆に言うと貯めこんでしまう、いろんなことを思っている、なかなか表現しなかったり。ということで、助けられるのが下手。うまくない。東北人氣質がどうもあったのではないのではないか。したがって、日本全国から多くの方が支援に来られても、ちょっと違和感を感じたり、支援しづらい点もあったのかなと思います。でも、地元ではそんなことはないと思います。②日々変わる震災地側の要望に対して組織的に専門的な対応が可能。特に復旧の段階で、これは日々変わります。私たちの大学の組織も、それぞれ

の地域の地方自治体のボランティアセンターと連携をとってやっていますが、毎日要望が変わるということで、明日は大人数で来てください、明日は少人数でとか要望が様々で、内容も多岐にわたっていました。③被災地側も地元なので、信頼もあり、依頼しやすい（お互いがわかり合ってる）といえます。④移動距離や手段ですが、一般的に平日はなかなか支援しづらいですが地元はそういう点で非常に動きやすい。そういう利点がございます。ですので、本学の学生を多く派遣できました。その時に大事なのは、派遣する組織の派遣への配慮です。この配慮が不可欠です。本学の場合は、一応指定した平日でしたら、この学科のこのクラスは何曜日の午前中は大丈夫とか、何曜日だったら一日大丈夫とか、そういう表を作りました。学生たちはその表にある日にちにボランティアにいても、欠席扱いにしないとかですね。そういうのを学長名で学生に呼び掛けたりとかしました。そういうことがないと、学生たちもなかなか単位の問題とか色々あって行きづらい。そういう阻害要因を排除してあげると、学生たちも積極的にボランティアに行ける。あるいは一定の回数をこなせば単位になると、そういった平日に行きやすい環境を作るのは非常に大切だと思っています。⑤そうすれば人数の調整、調達も細かく対応できます。⑥マッチングとかというのも非常に重要です。組織同士の連携でこういう点も非常にやりやすい、継続していけば、さらにそれがやりやすくなるということがあります。⑦地元ならではの手段や方法で支援ができるのではないかなと思います。あとは⑧長期に亘って復興支援を継続していくことも地元であれば非常にやりやすいのではないかと。このような8つの項目を挙げさせてもらいました。地元の組織がそういう点で貢献しやすい、貢献すべきなんだろうと思っています。

一方、仙台大学は体育系の大学、地方の小

さな体育会系の大学という認識があるかどうかと思いますが、体育系大学ならではの支援があるはずだということで、震災が発生してから3月の末までに、どういうことができるのかと学長を中心に話し合いをもちました。その体制を3月中にとって4月から動き出したということがありました。これは大学の広報誌ですが、9月号に特集が組まれたのでこれを紹介しながら、どういうことをやったのかを紹介したいと思います。こちらにありますように、「仙台大学災害ボランティア」という組織を学内に作り5つの領域を設定し、それぞれの責任者を設定して動きました。1つ目が「ガレキ撤去、泥かきだし作業」。本学の学生は自衛隊並みに働く体育大生ですので、パワフルな作業をもの凄いいパワーでやる。そういう点は、すごいと思いました。そういった力作業もやりましたし、「医療健康維持サポート」ということで、医師免許を持った教員あるいは看護師の方が現地に行って支援をするということもやりました。次に、「物資の提供」ということで、これもあの学校自体が流されたという中学校、小学校もいっぱいありました。やはりスポーツをやるのにも道具がないということで、そういう情報を入手して、それを集めて支援するとか。スポーツの体操着もないということでそれを送るとかそういった物資の提供もやったりしています。それと「施設の貸出」、さきほどもありましたが大会とか、試合をやりたいけれども場所がないという団体さんもありましたので、大学の施設をどうぞ使ってくださいと。幸いにも私どもの大学は避難所にはなっていませんでしたので、そういうことが可能でした。10月の8、9日に「東北の言葉博」というものを仙台大学の施設を提供して開催することになってまして、これも大きな復興イベントということでやります。そういった受け入れを積極的に今年はやろうということになっています。その次は、「栄養配膳サポート」ということで、

こちらはあとでも紹介しますが、地元の施設での栄養配膳サポートということで運動栄養学科の学生が中心にすることです。主にはこういう大きな5つの部門にわけて大学をあげて組織的に動いたということです。

こちらは大学の復興ボランティアの総責任者ということで学部長が写っていますが、仙台大学は地域に生かされている大学という認識がございまして、今こそ地域のために動かなければならないという信念で動いたといえます。特に4月中、大学は一切動けませんでした。5月に入学式を迎えましたので4月中に何もしない学生たちがいるのは非常によくはない、水道が出ないとか電気がつかないとか不便な生活体験だけが記憶に残るのはよくない、学生たちは自分たちも人のため世の中のためになるんだというセルフエフィカシーを経験させたいという思いがあり、学生たちに呼びかけたと。まずは、入学式まで大学でそういう支援活動をやったということです。これが6月29日までのボランティア登録者数ですが、622人が登録しました。主にどういう内容をしたかということ、被災地支援というものが一番多くて、その次に多いのが健康づくりサポーターということ。この2つが中心になったかと思います。この所属部活動と登録者数を見ればわかるかと思いますが、チームスポーツ関連のサークルの協力が多くという傾向がみられます。やはり、チームスポーツは他人へのサポートや助け合いを育む良いクラブなのかもしれません。あと、単独で参加する学生もいましたが、そういった学生は大半、家が全壊であるとか、家を流されましたとかそういった学生が個人的に参加していました。このような学生は、本当に真剣になんでもやるということがわかりました。一方、団体で参加する学生の中には、若干問題を起こす学生もおりました。その点は、なかなか難しいと感じていました。大事なものは、ボランティア支援活動に行く前の教育というのを

しっかりしておくことです。また、現地に学生を連れていくのは危険であるということもわかりました。何でもごみとして捨てるのではなくて、ひょっとしたら家族にとっては非常に大切なものであるかもしれないわけです。そういったことをしっかり教育して送り出すことが大事であるということです。

仙台大学は、福島県に近いところに位置しています。どういうところを支援したかというところ、美里、女川、蔵王、…特に地元ということで、柴田町、亘理町、山本町を中心に4月中はおこない、徐々に支援活動の範囲を広げていったということです。ここからは実際に支援をしている場面ですが、これが支援物資の仕分け作業。このピブスは、ある企業から300枚ほど無料で提供していただきました。こういうピブスを着て学生たちが実際に支援をしました。これも学生たちですが40人ならば40人分のオニギリ（一人2個）、お茶を運動栄養学科の学生たちが毎朝作って、ボランティアに行く学生や教職員のお昼を作ったりというようなサポートをしてくれました。こちらは亘理の中学ですが、卒業式の日震災があったということで、ここまで浸水しているのがわかります。そこのがれきの撤去を5時間かけまして、この状態にしたということです。本当に、東北の学生の気質ってさっきも言いましたが、黙々と作業をしまして、休憩って言わなければ何時間でも本当に作業をし続けるくらいの粘り強さがあります。この点は、本当に我々は感心するばかりでした。学生たちの中には、普段の授業中はボケっとしたりチャラチャラしたりしている学生もいましたが、こういうところに来ると違う一面が見れて、私たちが嬉しかったりするという記憶もあります。学生3~4人に対して教員が1人で1つのチームを作っていました。このコミュニティーセンターなんかは、大人数で行って、みんなで一斉に午前・午後に分けて復旧作業をやりました。こちらはエコノミ

一症候群予防の運動ということで、健康づくり運動サポーターという仙台大学独自のサポーター育成があるのですが、そこで学んだ学生が実際現場に行き、体育館等で被災に合わせた高齢者などの予防の運動を実施しました。こちらは仮設住宅に入って以降もサポートをやっていたというものです。これらは、実はいかにもその日に行きその日にやっているように見えますが、実はその日に行きその日に「じゃあ皆さん運動しましょう」と言っても反応が低いんです。まずは信頼関係を作ることからはじめないといけないという事を痛感いたしました。まずは、何回か通って、打ち解けてから運動に入ればいわけです。今後どこでも、こういうラポールの形成が必要なのだと思います。

一方、私は宮城県レクリエーション協会副会長をしていますので、レクリエーション協会もこういった場面での支援で力を発揮するんだなとつくづく思いました。特にレクリエーションはコミュニケーションを大事にします。信頼関係を作ってから色々する、アイスブレイクなどいいますが、そういうものが非常に得意な人たちが多くいますので、そういった人たちが集団で復興に向けて組織的に動くことが有効だと思います。宮城県レクリエーション協会もまずは、ボランティアを養成してから派遣しました。特に今年は全く県の主催事業ができない状況があり、それに代わることとして、県レクでは組織的に復興支援のボランティアをやっとうと決めました。そういうことから、ボランティア養成を始めたたり、それぞれの加盟団体さんに呼び掛けて派遣したりしています。どのくらいやったかという、途中集計の正確ではない状態ですが宮城県、岩手県、福島県のレクリエーション協会が震災復興ボランティアにどの程度行ったのかというのがこれです。それぞれ、半年の期間ですが、このような回数をこなしています。どんな活動を行ったかという、震

災発生から6月迄は話を聞いたりただ寄り添って話を聞くような、信頼関係を形成する内容が多くみられました。あとは、アイスブレイクゲームとか室内での簡単なストレッチ体操などの室内でできるものが中心でした。特に原発の問題もありましたので、なかなか外でできないということがありました。7月以降は、ある程度落ち着いてきましたので、徐々にアクティブな支援に移っていきました。ニュースポーツ、軽スポーツの指導。被災にあった児童とのキャンプをやったり。そのように、ニーズが変わっていくと、支援のやり方や内容も変わっていくものなのですね。もう1つ言い忘れてはいけないことは、ラポールの形成が非常に大事だという話をしましたが、見ず知らずの人がいきなり行くのが大変なんです。それが芸能人やアスリートならばOK。その人たちのネームバリューもありますし、いきなりいってもやれるんです。その点では、ぜんぜん違うということもあります。

被災地のスポーツ環境も大きく様変わりしました。体育館は避難所に、野球場は基地の最前線、サッカー場は仮設住宅。プラスアルファでスポーツ活動を支援するのはかなり難しいということがわかりました。あとは、土日祝日の子供たちの対応をどうするんだということなど、色々な問題があります。また、野外活動の時間が制限されることもあります。実際現場はどうかというと、これは野球場ですが基地の最前線で、自衛隊のテントやトラックなどが野球場を埋め尽くしているという状況もありました。女川総合運動公園も同じように、このような最前線になっていました。ここの体育館に勤務されている方が鹿屋体育大学の卒業生で、いろいろ話を聞かせていただきました。様々な方が頑張っている場面も見ました。

最後に、宮城県は今後の復旧・再生・発展を、10年間に亘りそれぞれのスパンを決めてやっとうとすることを決めました。スポ

<黒須氏発表>

ーツはどうかというと、各市町村の復興計画においてどのように位置づけられるかによって全然違ってきます。スポーツや体育は二の次、三の次になる可能性も0ではない、そこは我々ももっと積極的に訴えかけていく可能性があると思います。

仙台大学は地域と連携をとってやっておりますし、特に今日の午後のシンポジウムで石巻専修大の山崎先生がお話になられますが、石巻専修大は特に大きな被害を受けて最前線で支援をされています。東北福祉大も早くから取り組んでいる状況もありました。

まとめに入りますが、われわれは何ができてきたのかというと、組織的に動いたことで日常を取り戻す支えとしてある程度貢献できた、組織的に取り組むことで大きな貢献になったのではないかと思います。今後は、地域ごとの実状やニーズに合わせて、キメの細かい支援をしていく必要があります。ニーズだけ把握するのではなくて、我々の組織、あるいは団体が、実際どのようなことができるのかという情報を逆に被災地に発信していくということも考えております。仙台大では、個々のクラブで何ができるかを調査して、それをもとにHP等で情報を発信して支援に当たっていきたくて考えています。体育協会などの色々な組織もいろんな活動をしてはいますが、質問等があればその時にお応えしたいと思います。以上で発表を終わります。

北村氏：

仲野先生ありがとうございました。実際の被害の状況を改めて見させていただきますと、非常に大きな災害だったなど、六ヶ月たった今でも感じます。仙台大学での具体的な取り組みを中心にお話をいただきました。それでは続きまして、同じく震災の被害にあわれました黒須先生のほうから地域スポーツという観点からお話をお願いしたいと思います。

黒須氏：

皆さんこんにちは、福島大学の黒須と申します。私は今回の地震で自宅が全壊し、避難所に2週間ほどお世話になった後、現在もアパートに仮住まい中です。このように被災者の一人として、そして被災地の大学に勤務するものとして、スポーツによる復興支援の可能性について、研究対象である地域スポーツに着目してお話したいと思います。3月11日あの日は東京の地下鉄で地震に遭いました。幸い、タクシーを捕まえることができましたので、とにかく近くまで行ってほしいということをお伝え、タクシーを3台乗り継いで、約18時間かけて福島にたどり着きました。自宅は瓦が周りに散乱し、玄関やドア、サッシも外れ、ガラスもことごとく割れ、部屋の中はぐちゃぐちゃになっていました。とにかく家族の安否を確認するため、避難所に向かいましたが、そこで家内と母親に再会することができた時は涙があふれて止まりませんでした。人前で初めて妻を抱き締めました。震災後、私のところに全国のクラブ関係者や知人から安否を確認する連絡が届きました。「自宅は壊れましたが、家族は全員無事です」と返信を返すと、「被災地のスポーツを支援したい、クラブの仲間を支援したい、我々に何かできることはないか？」という相談が多数寄せられました。避難所生活を送っていたことや学生委員という立場で学生の安否確認に追われ、自分自身が動くことには限界がありましたので、全国の総合型クラブと被災地のクラブをつなぐ中継所の役割を果たすとともに、震災後の総合型クラブについて書き留めておきたいという思いに掻き立てられました。本日の発表では、総合型クラブが行ってきた被災地支援活動の取り組みや事例を紹介して、スポーツによる復興支援の可能性と今後の課題について明らかにできればと考えています。

研究の方法ですが、1 つ目が岩手県、宮城県、福島県の震災後の総合型スポーツクラブの現状について、3 県の広域スポーツセンターのスタッフやクラブ育成アドバイザーからヒアリングを行い、時間が少しできたときに被災地のクラブを訪ねて、クラブ関係者の声を記録に留めるという作業を行いました。

2 つ目は、被災者・被災地の支援活動を積極的に行っている総合型クラブの情報を集め、可能であれば現地を訪問し、関係者へのインタビューや資料収集を行いました。まず、岩手県の北上市にある総合型クラブ NPO 法人フォルダのスタッフと一緒に陸前高田市を訪ねた時の写真を使って、被災地の状況を話したいと思います。この写真は陸前高田市の金剛寺というところから撮影をしたものです。TV の映像を通してある程度分かっていたつもりでしたが、現実に目にした光景というのは想像を絶するものでした。建物は土台を残してまったくなくなっており、一面果てしなく続く平原のような光景でした。三ヶ月後、瓦礫は片づけられましたが陸前高田市は市役所も商店街も JR の駅も全て津波で流され都市機能が喪失しているため、復興の目途は全く立っていません。先ほど、仲野先生のお話にもありましたが、高台にある学校のグラウンドや野球場等のスポーツ施設は全て仮設施設が建設され、市民が震災前のようにスポーツ活動を再開するためにはまだまだ時間を要することがわかりました。海岸線には、2km にわたって約七万本の松が植えられ、夏は海水浴客などがたくさん訪れていた名勝「高田松原」は、ほぼ全ての松がなぎ倒される中、奇跡的に 1 本だけ生き残りました。まず、震災後の総合型クラブの現状ですが 3 つの県に共通することは、クラブ関係者の多くが被災にあっていることや活動拠点を失ってしまったため、活動再開のめどが立っていないということです。一部再開しているクラブもありますが今年度の会費収入が見込めず、経費を

切り詰めるなどの自助努力を行っているものの、先行き不透明な状況にあると言えるかと思えます。

ではここから、被災者・被災地の支援活動を積極的に行っている総合型クラブについて特徴的なところを 10 ほど紹介していきます。まず、岩手県北上市にある NPO 法人フォルダではクラブ内にボランティア組織「いわてゆいっこ」を立ち上げ、震災の 6 日後から毎日のように大船渡市や陸前高田市（車で往復 4 時間）を訪れ、twitter などによる呼びかけで集まった支援物資を避難所に届ける活動や、各避難所を回って被災者の現状や要望を聞きだす活動を行っております。資料の表 1 をご覧いただければと思います。これが NPO 法人フォルダの被災支援活動について 5 月末ぐらいまでのものを一覧表にまとめたものです。震災後 6 日目によりやく沿岸部への道路がつながったため、司東さんという方と今西唯さんの 2 人を中心としたグループで被災地に出かけ、必要な物資や要望を聞き出し、長屋さん等事務局メンバーが北上市の事務所に残り、フォルダの会員や市民に呼びかけ、全国から届けられた物資の仕分け作業や電話対応、炊き出しの準備等を行いました。活動の風景を DVD にまとめてみましたので、ご覧いただければと思います。フォルダでは、「広く、浅くではなく、狭く、深く」をモットーに行政では手が回らない場所を中心に支援活動を行ってきました。一例が松峯団地です。避難所には、支援物資が届けられていますが、その反面、自宅で避難されている人たちには物資が行き届いていませんでした。そこを毎日訪ね、なにが今足りないか、どんなものが必要かを聞きだして、また北上に戻って全国にその物資の提供を呼び掛けて、集まってきたものを次の日にまたそこに届けるというような活動をしてきました。これは上村愛子さんらスキー関係者の方々から 300 箱のスキーウェアが送られてきた時の映像です。これは大阪府の

総合型クラブの人たちから支援物資が届いたものを写真で撮ったものです。映画上映、読み聞かせ、子供や高齢者の運動指導、メール手紙届け、豚汁・おにぎり炊き出し、花見温泉ツアー、歯科衛生指導、フラダンス、美容室送迎、避難所コンサート、郷土芸能、菓子作り、沖縄エイサー巡回公演など、行政ではできないきめ細やかな支援活動を展開しています。

それでは時間の関係もありますので、2つめの宮崎市にある半九レインボースポーツクラブの活動について、ご紹介していきたいと思えます。半九レインボースポーツクラブの澤山氏等は、地震発生2日後に、支援物資を自家用車に積み込み、宮崎市から片道約1,700km、28時間かけて仙台市にやってきました。それ以来、これまで6回東北を訪れている。簡単に表に従って紹介させていただきますと、1回目は津波の被害を受けた仙台空港の映像を見た瞬間、いても立ってもいられなくなり、家にある飲料水や食料品を車に積めるだけ積んで、宮崎市の自宅を出発したそうです。被災地は、水道、ガス、電気すべてが止まっており、何もかもが不足している状態であった。もちろんスーパーやコンビニ等もすべて閉まっていたため、山形まで引き返し、食料、飲料水、果物などを調達し、宮城野区の避難所に届けました。2回目は、一人では限界があると感じ、宮崎県内の総合型クラブの仲間に応援を呼び掛けたところ「うづらスポーツクラブ」、「佐土原スポーツクラブ」、「住吉スポーツクラブ」等からたくさんの支援物資が届けられました。そこで4tトラックを借り、それらの救援物資を積み込み、再び被災地に向け出発しました。宮城県塩竈市の「塩竈FC」や七ヶ浜町にある「アクアゆめクラブ」を訪ね、日向夏みかんや宮崎野菜ジュース等、ダンボール約500個の支援物資を届けました。3回目は、「ありがとう！宮崎チーム」のメンバー8名がマイクロバスと大型

ワゴン車に分乗し、宮崎市を出発、フェリーで大阪に上陸したのち、岐阜県瑞穂市にある「なかよしクラブすなみ」や新潟県新発田市にある「とらい夢」に立ち寄り、お米やお菓子など追加の支援物資を積み込み、東北の被災地へ向かいました。2回目同様、塩竈FCやアクアゆめクラブを訪ねた他、原発から20km・30km圏内の人たちが多く避難している福島市の「あづま総合体育館」と郡山市の「ビックパレットふくしま」を訪ね、日向夏みかんやジュース等の支援物資を届けました。さらに、石巻市の避難所を訪ね、飲料水、お菓子、鯉のぼりを届けてきました。4回目以降は申し訳ありませんが時間の関係で省略させていただきます。

3つ目の事例である新潟県新発田市にある総合型クラブ「とらい夢」では、クラブの事務局がある「サンビレッジしばた」と活動場所の一つである「カルチャーセンター」が震災直後から避難所となったため、クラブスタッフは体育指導委員と共に避難所内を巡回し「体調はいかがですか。気分転換に身体を動かしてみませんか」と声をかけ、個別的にストレッチの指導を行ってきました。その後、新発田市から「場所を確保するので、定期的で開催してはどうか」という提案を受け、体育指導委員、とらい夢の指導者4名、スタッフ2名の計6名のボランティアで被災者の方を対象とした「エコノミークラス症候群予防運動教室」を実施することになり、延べ253名の方々が参加されました。

4つ目が和歌山県上富田町にあるNPO法人くちくまのクラブ「シーカ」です。シーカでは、福島の子どもたち30名を招待し、7月30日～8月7日までの日程で白良浜海水浴場、熊野古道、渡瀬温泉、アドベンチャーワールドなど紀南の自然を満喫してもらう交流プログラムを実施しました。放射能の影響から屋外での活動を制限されている福島の子どもたちが、鮎つかみや飛び込みなど、文字通り、

水を得た魚のように元気に活動していました。

5 つ目の事例である宮城県石巻市にある「石巻スポーツ振興サポートセンター」の松村理事長は、震災による津波で自宅が流され、避難所生活を余儀なくされたにもかかわらず、総合型クラブの活動を通して培った幅広い人脈を活かして、積極的に被災者・被災地支援活動を行っています。特に、避難所でなかなか体を動かすことの出来ない子供たちを対象としたドッジボールやキックベースボールを開催したり、津波で全壊した住宅地などを歩く復興ウォーキングというものを企画し、県外からも多くの人が集まってきています。

6 つ目の事例である石川県かほく市にある「NPO 法人クラブパレット」は、クラブのマイクロバスとワゴン車に総勢 23 名が乗車し、同じ総合型クラブとして活動している南相馬市の「南相馬遊夢クラブ」を訪ね、側溝の泥出しやガレキの撤去作業、塩害対策のために田んぼにヒマワリの種を蒔くボランティア活動を行いました。参加者のつながりは今も継続して続けられています。

7 番目の事例である埼玉県さいたま市にある「NPO 法人浦和スポーツクラブ」では、毎月の会費の引落に 1 世帯あたり 100 円を上乗せすることとし、1,000 世帯を超える会員が賛同して参加しています。また、埼玉県の総合型クラブ連絡協議会では、被災地から埼玉県に避難してきた人たちがクラブの活動に参加する場合、今年度中について会費を無料で受け入れることを決定しました。この他、埼玉県内のクラブと協力し、県立騎西高校跡地に避難している福島県双葉町の皆さんのところに伺い、歌声広場や健康体操などのプログラムを提供しています。

8 番目の事例である福島県塙町にある福島県塙町にある「はなわふれあいスポーツクラブ」では、高齢の「どろ祭り」をチャリティイベントとして企画・実施し、参加費を義捐金として寄付するという活動を行っています。

そして 9 番目の事例である東京都八王子市にある「NPO 法人はちきた SC」は、大型バスによる被災地支援ボランティアツアーを企画し、復興支援のための活動を行っています。

ここで海外からの支援を一つ紹介させていただきます。こちら写真を見ただけながら、私の方で概要を紹介いたします。「夏休みに福島の子どもたちをドイツに招待したい」と書かれた 1 通のメールが私の元に届きました。差出人であるアクセル・ベッカー氏が所属するライン・ノイス郡スポーツ連盟と、加盟する地域のスポーツクラブが連携し、渡航費とドイツ滞在に関わるすべての費用をノイス郡側で負担するめどがついたので、私に福島県との橋渡しを依頼したいという内容でした。本プロジェクトは 8 月 2 日から 9 日までの 7 泊 9 日の日程で実施され、福島県内の総合型クラブで活動している中学生 20 名が参加しました。ほとんどが初めての海外旅行とあって、食べものや気候の違いに戸惑う子もいましたが、本当の家族のように温かく迎えてくれたホストファミリーと生活を共にして、ドイツの子供たちと一緒にスポーツを楽しむうちに、次第に打ち解けていくようになりました。子どもたちは陸上、水泳、バドミントン、テニス、サイクリング、アスレチックそして屋内のスキー場でスキーやスノーボードなど、普段体験できないプログラムに驚きながらも元気に活動していました。震災以来、放射能の影響で屋外での活動を制限されていた子供たちの表情は、新鮮な空気を胸いっぱい吸い込んで現地のグラウンドや芝生の上を思いっきり駆け回り、転げまわったりするにつれ、だんだん明るくなっていきました。遠い外国の一つであったドイツを、不思議なめぐり合わせで訪れることになった子どもたちが、帰国前にこのようにメッセージを書いて、ホストファミリーに届けました。

それではまとめの方に入りたいと思います。支援活動のフェーズは大きく 3 つの段階に分

かれています。1つ目が命をつなぐ支援、2つ目がスポーツや健康プログラムを通じた支援、そして3つ目が人と社会をつなぐ支援です。まずは命をつなぐことで精一杯の時期がありました。スポーツの話をするのは不謹慎という状況の中、食糧や生活物資、炊き出し、被災した家屋の片づけ、瓦礫の撤去、そして義捐金を呼びかけ、被災者・被災地に届けることが優先された時期、これが第一段階です。現在、避難所から仮設住宅に移り始めていますので、仮設住宅での孤立・ひきこもりという問題に対して、交流やふれあい、情報交換の場や健康づくり、そういった積極的に外に出る機会をスポーツで支援する段階、これが二つ目の段階です。そして3つ目が人と社会をつなぐ支援です。失われつつある地域コミュニティを再生するために、震災をきっかけに生まれた社会的絆・社会的なネットワークを構築するための支援です。このネットワークの力を総合型クラブが有していたことが被災地支援において有効に機能したのではないかと考えています。第1は「クラブ内ネットワーク」の力です。クラブには様々な知識や経験、ノウハウや人脈を持った人たちがいます。社会的キャリアや個性が違う人たちが力を合わせ、被災地支援活動に取り組みました。2つ目は「地域内ネットワーク」の力です。総合型クラブが地域内の各種団体の結び目の役割を果たしました。いわゆる垣根を超えた横のネットワークの力です。そして3つ目がクラブ間ネットワークです。志を同じくする全国のクラブがネットワークを組めば、大きなパワーになることは10の事例で紹介した通りです。

次に今後の課題に触れたいと思います。被災地・被災者支援を一過性に終わらせてはいけません。数年、十数年にわたる継続性、持続性のある支援活動が必要です。8月25日現在、岩手、宮城、福島3県の県外避難者数は6万人を超えています。3県の県外避難者数は

岩手 1578人、宮城 8400人、福島 5万 5793人と、特に福島は福島第1原発事故の収束のめどが立たないことなどから、県外避難者の動向を見通せない状況が続いています。そうした中、自助、共助、公助が三位一体となって復興に取り組むことが必要です。政府や地方自治体の支援に過度に依存するのではなく、住民主体の復興が求められると考えています。一つの解決法として、被災地に地域コミュニティの拠点となる事務所等を開設して、復興に向けて地域住民が協力し合う、そういった体制作りを構築する、新しい地域コミュニティづくりと地域スポーツ再生という目標を掲げて、地域社会の協働を促進するために総合型クラブは有効なツールの一つになるのではないかと考えています。その他、被災地のクラブと被災外地域のクラブをカップリングして、姉妹クラブのような交流を通して、お互いが助け合い、支え合いを奨励するというようなことも考えられるのではないのでしょうか。

わが国では、スポーツ、あるいはスポーツクラブが果たす社会的役割というものについての経験的基礎が欠けていると言われていています。ここでは、地域スポーツクラブがシステムとして持っている能力をいくつか挙げてみたいと思います。スライドの「Sport & Society」という図式はミュンスター大学のシュルツ教授が提唱されているものですが、簡単に言えば、スポーツというものはスポーツそのものの振興だけを担えばいいという時代は終わった、これからは健康や福祉や教育、経済や環境や地域づくりなど、スポーツを超えた組織づくりが求められている、スポーツが社会政策的にもきわめて大きな役割を担うようになってきている、地域スポーツクラブにも社会的な責任が求められる、そんな時代を迎えてということです。

最後に、現代社会は個人主義化が進行して、社会の形成において欠くことのできない個人間のつながりや、信頼関係、規範意識が希薄

化しているといわれています。しかし、今回の震災によって、助け合い、支え合い、自治体同士の相互支援等、人と人、組織と組織、地域と地域の結びつきや絆の大切さが見直されるようになってきました。今回、総合型クラブの被災地支援に着目して研究を進めてまいりましたが、地域スポーツクラブがシステムとして持っている能力の中に、経済優先の社会やモノの文化とは対極的な価値を人々に伝える力があり、これからの復興にきわめて重要な役割を果たす可能性があるのではないかと感じました。陸前高田市の避難所で会った、ある避難者の言葉がとても印象に残っています。「失くしたものはいっぱいあるけれど、人々の繋がりは強くなった」。東日本大震災が、経済を優先し、便利さを追い求め、モノにあふれ、仕事に追われる日本人の価値観を大きく変えるきっかけになったこと、スポーツがうまく機能すれば、地域の絆を取り戻し、日本社会全体が元気づけられる起爆剤となることを最後に述べ、発表を終えたいと思います。ご清聴ありがとうございました。

北村氏：

黒須先生どうもありがとうございました。いくつかのクラブの支援の具体的な内容をお話頂きまして、その中から、総合型クラブという全国にあるクラブが一つの大きなネットワークでつながっている、そして、そういったクラブが非常に大きな役割を持っているということを感じさせて頂くような内容だったと思います。では、最後の発表者になりますけれども、早稲田大学の間野先生の方から、スポーツの社会的役割と可能性の再考、日本アスリート会議の事例をお話しいただきたいと思います。お願いいたします。

<間野氏発表>

間野氏：

この度はこのような報告の機会を与えていただきまして、誠にありがとうございます。一般社団法人日本アスリート会議、たぶんみなさんまだ聞いたことがないと思いますけれども、新しい団体で小さな活動を震災を契機に始めました。3月11日、その日から、震災だけでなく原子力発電所の爆発などあって、東京に暮らしながらいったい自分は何ができるんだろうと悶々としていました。もちろん現地に行って何かする、といっても立っても居られない気持ちもあったんですけど、この震災直後に関してはスポーツは無力かもしれないけれども、これが三ヶ月、四ヶ月、あるいは半年、一年と経ってきたら、きっとなにか被災地でもスポーツを求めるんじゃないのか、そういうことを考えて、何ができるか、どうしたらいいだろうか、僕自身は何ができるかということを考え続けた中で、3月15日にこういう組織を作って、長期的に活動を展開したらどうかという着想を得ました。それは何かといいますと、アスリート、スポーツそのものというよりもアスリート、こういった人たちは、人々に夢と希望を与えることができる本当に稀有な存在でありまして、先ほどお話ありましたけれども、アスリートがいけばすぐそこで会話、コミュニケーションが始まったり、なにかができるという、特に子供たちにとっては大きな憧れであることは言うまでもありません。

同時に、多くのアスリートが、特定非営利活動法人、NPOなどを作ってですね、10年前から様々な社会貢献活動をやっています。例えば、アスリートネットワークという組織であったり、NPO法人MIPスポーツプロジェクト、あるいはNPO法人SCIX、といったようなもの、アスリートネットワークは柳本晶一さんが、MIPスポーツプロジェクトは倉石平さ

ん、日本プロバスケットボールの元監督ですね、シックスはラグビーの平尾誠二さんなどが、昔からこういうことをやっておられるということを、私自身がアドバイザーとしてお手伝いしたりということもありまして、これらのアスリート NPO の連携を思い付きました。こういった組織が手を取り合って、競技種目の枠を超えて集って、目標や想いを共有することで、人々にもっと大きな夢や希望を与えることができるんじゃないかと考えました。同時に、きわめてプラクティカルに、こういう組織が立ち上がったとしたら、これを機能させるためには法人化やあるいはお金や、そういったものが必ず必要になる、そのためには、4月1日付でもう法人組織を立ち上げようということを考えました。一般社団法人にしたのはなぜかという、一番早く、簡易にできる公益法人なんですね。NPO 法人ですと10人必要ですし、その他いろいろなことを考えて、3人だけで作れる組織ということでこれを立ち上げました。

【映像紹介】

いまご覧頂いたように、日本アスリート会議はアスリート NPO の中間支援団体です。日本代表チームの監督経験者で、自発的に社会貢献活動を組織的にやってらっしゃる様々な団体がございます。これらの方々がシンボルとなって、これからの百年、このアスリートの活動を支えていくということをご話合ったわけです。このアスリート会議というのは単なるアスリート派遣の会社ではなくて、すでにやっている活動をさらにパワーアップさせていくために横軸を通すという組織であります。アスリートの方々は一人ひとりが自分に出来る方法ですである NPO に参加していただいて、人々に夢や勇気を与える手助けをする、その中間支援団体ということなんです。活動としてはここに書いてあるように5つあ

りまして、社会貢献活動、アスリートや NPO がやろうとしていることを支援する、あるいは NPO 同士の横の連携を促進していく、アスリート自身の活動する場の提供、スポーツ立国戦略の中でも、好循環というのは言われています。こういったものを促進していく。あるいは調査研究と同時に、こういったことを発信していくためには、社会的に影響のある、元アスリート、あるいは現在の代表監督のような方々がまとまって声を上げることによって、この活動を促進できるのではないかと考えたわけです。ここにあるように、基本的にはアスリートの NPO が活動する、それに対して協力、相談あるいは情報提供する。とりあえずやらなければいけないことが被災地の復興支援だということをお話したわけです。総合型地域スポーツクラブや各種スポーツ団体、教育機関、大学などがあるわけなんですけれども、調査研究いろいろあるんですが、5つあるうち、まず被災3県でなんとかしようと思った時に、ニーズに合わないことをやったらこれは単なるありがた迷惑だ、おしつけになる、じゃあ現地のニーズはどうしたらいいんだろうかということで、黒須先生にも相談しまして、黒須先生自身が総合型の様々な情報をお持ちでしたし、クラブネットでも、どこのクラブは活動できる、できないという情報も持ってました。受け入れ組織がない限り、私たちがいくら徒党を組んで行ってもうまく機能しない、そこで、7月3日になりましたけれども福島大学の黒須先生あるいは岩手大学の浅沼道成先生も今日いらしてまずけれども、仙台大学の丸山富雄先生にもお集まりいただいて、ウォームアップジャパン実行委員会というものを作っていただいて、受け入れ体制というものを用意して頂きました。つまりアスリート会議というものはプログラムを供給する、そちらの仕組みであって、今度は被災地の受け入れる側の仕組み、このマッチングをどう行なっていくのか、というこ

とを進めました。

似たような組織は実は海外でありまして、1992年にはアスリートカナダ、2004年にはブリティッシュアスリートコミッションという組織もあります。オーストラリアでも2007年、あるいはヨーロッパエリートアスリートアソシエーションという15カ国のプロスポーツ選手協会のこういった連盟もできてきたりしています。カナダは古いですが、2000年代に入ってから、アスリート自身が主体的に組織化していく、こういった活動がある、それに類した活動として展開していこうと考えました。当面の活動をウォームアップジャパンと名前をつけまして、被災地でアスリートプログラムを展開しています。まず最初にやりましたのが、ウォームアップジャパンイン福島リフレッシュキャンプ、場所が国立青少年自然の家というところで、福島県内の小中学生が毎回50名から200名程度参加しました。放射線量の高い地域にすむ子供たちを対象に、アスリートによるプログラムを実施いたしました。主な参加アスリートは、お手元の資料の通りでございます。これやる時も私たち実はすごく悩みました。福島県の親たちは、子どもたちを外に出したくない、みんなマスクをして長袖を着てそれで学校に通っていると、そんな子供たちを、スポーツというものを餌にして、外に出していいのかという保護者からの反発が来るんじゃないのか、ということも心配いたしました。結果としてあけてみると、放射線量の比較的低い地域、ということもありまして、多くの子供たちが毎回満員になると大盛況でありました。これは活動風景です。これは9月13日付で朝日新聞にこの活動を報道していただきました。その他に、福島大学と共催いたしまして、「ウォームアップ・ジャパン from Tokyo」、from Tokyo というのは東京都が分担金を出して下さっています。活動財源としましては、東京都から1200万円、分担金というものを出して

頂きました。また、先ほどの福島の別のプロジェクトに関しましては、NAASH、サッカーくじの助成金から約2200万円のお金が出ております。年度を超えてということですので通常はあり得ないんですけども、緊急事態ということで急ぎよ助成金を頂いております。こちらは、他の高校に間借りしながら高校生活を送られている福島県在住の高校生を対象に様々なプログラムを提供すると、段取りはすべて福島大学の先生方、学生の皆さんが付けて下さっておりまして、私たちはアスリートを説得して、プログラムを提供する、これは宇津木さんですね。簡単なアンケート調査もとっているんですけども、散り散りばらばらに高校生が避難生活しながらバツの学校に通ってますので、久しぶりに会えて楽しかった、とか、他の学校と交流出来てよかったとか、こんな言葉も聞いて、提供した方としては良かったなと感じています。

これは先月1泊2日で岩手大学を中心に、岩手スポーツクリニックというものを提供いたしました。東日本大震災で被災し、日常におけるスポーツ活動が困難になっている主に沿岸部の中学生を対象に、被災地から盛岡まで2時間から2時間半かかるんですね。そうすると日帰りだとちょっとかわいそうだと、朝早く連れて来てスポーツやらせてくれたらなって、そうではなくてリフレッシュできるということもあって、そこで1泊2日のプログラムというものを提供いたしました。この日は大曲の花火大会で、盛岡でもほとんどの宿舎がいっぱいだったんですけども、岩手大学の強力なコネクションを使って、人数分の宿舎を確保しまして、1泊2日、送迎用のバス、宿泊費、その他もろもろの経費はすべて東京都が負担してくれました。これはその時の風景であります。剣道というのも岩手大学と言いますかウォームアップジャパン実行委員会からの要望に応じて種目も決定しております。更に申し添えますと、NPOがやる、

ということですので、こちらに関してはアスリートネットワークという大阪のアスリートのグループたちが、岩手県の要望に応じて、テニス、ソフトテニス、バスケットボール、剣道、バレーボールといった要望がありましたのでアスリート同士が自分たちで声を掛け合って集まってきてくれています。この時もアンケート調査をしておりますけれども、つまりどのような効果があるのか、ないのかということを検証しようということっております。その他にも、全国のアスリートに調査を致しまして、すでに社会貢献活動、NPOに参加している人たち、736人にアンケート調査を行いまして、回収数は82と多くは無いんですけども、社会貢献活動としてこれから行いたいものとして地域でのスポーツ指導、72.0%とか、学校での体育、部活動の指導をやりたい、とか、つまりアスリートが教えたいたいということと、現地の方で教わりたい、来てほしいというこの両者がマッチしない限りは、うまくいかないと考えておりますので、これを定量的に調査をした上で、うまくつなげるように進めていきたいと考えております。

被災地3県の142の総合型スポーツクラブにもアンケート調査を行いました。調査の回収数は60、回収率は42.3%でした。派遣について、調査するまで分からなかったんですけど、希望しないという総合型クラブが44.3%あるんですね。つまり行けば喜んでくれるとは限らなくて、来てほしいところに来てほしいタイミングでプログラムを提供する、これが息の長い活動をしていくためには重要だという、で受け入れを希望しない理由としては、受入れ費用を負担できない、お金がないといったこと、まあこれはtotoの助成金や分担金でなんとかなるんですが、もう一つは集客を期待できないというのがあって、人が集まらない、連絡がつかない、だから来てもらってもうまくいかないという、この問題をどう解決するのか、というのはこれからの大

きな課題であります。

今後の課題といたしまして、アスリートのNPOといのはまだまだたくさんございます。山下泰裕さんいらしてますけれども、山下先生もNPO活動なさっていますし、他にも多くのアスリートの方々がNPOをやっています。こういったものを集まって連携して情報交換していくことはできないか、これが一点目、二点目が諸外国のアスリートNPOとの連携促進、日本の中だけでのアイデアや活動だけでは限界があるかもしれません。それぞれの国でやっているアスリートNPOの中で、日本でも応用した方がいいようなユニークな活動であるとか、アイデアがあるかもしれません。これに関しては、山口泰雄先生にアドバイザーになって頂きまして、海外のNPOと連携を促進していきたいと思っております。それと情報発信力、今日初めて聞いたという方もおられるとおもいます。かなり大々的に私たちに打ち上げたつもりなんですけれども、まだまだ知られてません。知られていないところにニーズはおきません。被災地も含めてですけど、知っていただくため、そのための情報発信力を強化していきたい、そして事務局組織、事務局といっても実質私とあと2人の理事と3人でなんとか切り盛りしている、というのが実情なんですね。やっぱり事務局がしっかりしない限り、こういう活動は展開できません、これをそうしていくのか、実はそのためにはお金が必要です、これをどう集めていくのか、東京都、NAASH、totoを含めて3千数百万円の支援をして頂けたんですが、これは中間支援組織には残らないんですね、すべて現場で使う、実際に発生する経費、でもこういう組織を持っていれば当然に事務局の経費、事務所も借りていますし、電話やファックスやメールやホームページ、こういう組織が存在するだけで発生するそういうお金があるんですが、それは協賛金という形でみなさんをお願いしているんですけど

も、情報発信力が弱いこともありまして、現状では百数十万円、これでは一年ももたないような状況であります。ぜひこの活動を長く続けていきたいと考えておりますので、早急にこの5つの課題というものを解決していきたいと考えております。そのためにも、今日は筑波大学の高橋義雄先生もおこしになっていきますけれども、多くの方にアドバイザーということで、多角的、多面的いろんなところからご支援いただいておりますので、ぜひ皆さんからもこういう活動はこういうものを参考にして、こういう風に展開すればいいよ、というようなアドバイスを頂戴したいと思います。以上で私の報告を終わります。

北村氏：

間野先生ありがとうございました。震災から一ヶ月経つか経たないかのうちにこういった法人を立ち上げられる、非常に実行力がありますし、このアスリート会議という組織で、それぞれの活動に横串をさすというところで、これかの連携が強まっていくと、非常にユニークな面白い活動ができるんじゃないかという期待を持ちながら聞いておりました。それでは、発表者の皆様壇上に上がって頂きまして、指定コメンテーターのお二人からコメントを頂戴していきたいと思っております。

＜山本氏から演者への質問＞

長ヶ原氏：

パネリストの方に発表頂きまして、我々が断片的にしか知らない情報を非常に深くご報告を頂きました。たくさんの質問をおそらくフロアの皆さんも考えてらっしゃると思いますが、その前に、お二人のコメンテーターがいらっしゃっていますので、まずは山本先生の方から御三方へのご感想、コメントいただきまして、その後にお一人ずつに質問を一つということで、して頂ければと思います。よろしく願いいたします。

山本氏：

大変深い関心を持って聞かせていただきました。ありがとうございました。まずは、全体的話をまとめてみますと、スポーツによる復興支援と言いますのは、言葉を変えて言いますと、スポーツによる社会構築、それとほぼ同義なのではないかと御三方の話を聞いて感じました。求められるベースが運動なのか、レクリエーションなのか、スポーツなのか、このあたりが地域や受け入れる側の状況によって随分違っているんだなということもわかりました。

私、話を聞いている時に、スポーツの支援に回る時の体制というのが軍の派遣に似ているんじゃないかという感じがしたんです。調達、補給、整備、計画、要員の配置、実行、さらに点検というのも必要なんですけども、そうしたところが軍とよく似ている。目的を達成するために、ということで軍という言葉を使いましたが、実際に人間の活動としてやる時の手順は同じなんじゃないかとそういうイメージを持ちました。今回の震災の最大の特徴は、被災した地域の状況が大きく異なる、という点ですね。これは先生方の指摘にもありましたが、津波なのかそれとも放射能なのか、というところですが、これは地域

的な広がりだけではなくて、時間的な問題もこのあといろいろな意味での変化をきたしていく大きなファクターではないかと考えています。そのような中で、スポーツ緊急援助隊であったものが、スポーツ社会構築隊に変わっていく過程にあるような気がしております。

仲野先生からは、地元密着であるが故の細かい情報も出して頂きました。綿密なデータがありまして、逆に言いますと、生き残った人たちの年齢構成がどのように変わっていったのかですね、震災前の年齢構成と震災後の年齢構成がどう変わったかによって、今度は受け入れる側の需要というか、それもかわっていくのではないかと。そういった推論を立てるには、あらかじめ現地のスポーツ需要に関する事前の情報が必要です。かといって、細かいところまで刻々情報を取っていくわけにもいきませんから、となりますと、ある意味ニュートラルな方策というのものの必要かもしれないなと思いました。

地元のボランティア組織が立ち上がらなければいけないという指摘、それをカバーするものではないかなという風に受け止めました。大学が貢献できるというのが見直されたご自身評価をされていましたが、対応能力が高い、地域の特質、時間の変化、距離的な近さ、派遣への細かな配慮、そういった部分をおっしゃっていましたが、私は大学というのは総合力を持っている、そこが強みの一つになっている気がするんですね。まさにその大学そのものが一つの軍、連隊として動いたような、そんなイメージを持ちました。信頼関係がないと運動してくれない、ボランティア養成を済ませてから派遣しよう、レク活動内容の変化、多くのキーワードが出て来て大変に参考になる話だったと思います。特に時系列で変化に対応している、これ非常に重要な指摘だと受け止めました。組織的に動けたことで日常を取り戻すための貢献ができた、これは地元にはらっしゃるからこそこうした実感をお

持ちになったのではないかと思います。そこで仲野先生に一つ伺いたいのは、住民の意向調査、社会体育関係者へのリサーチ、そういったものをどのように進めてこられたんでしょうか。

仲野氏：

はい、詳細なところまでは言及はできないんですが、分かる範囲でお答えします。まずは被災地の住民への意向調査の件ですが、もともと復旧期の住民のニーズを私たちがどこから情報を入手していたかということ、それぞれの自治体のボランティアセンターというのが立ち上がりまして、そこが住民のニーズであるとか、どこに支援が必要なのかという情報を刻々、毎日収集してそれをホームページに載せることにより入手しました。あとは社会福祉協議会も同様の調査をし、同じような情報が発信されて、それを私たちやいろいろな組織が入手して、できるところが対応して支援をしていったということです。社会体育関係者へのリサーチ、というところですが、たとえば県レベルでいきますと、宮城県であれば県のスポーツ健康課というところが調査をこれからするようなんです。また、これまでどのようなところが調査をしたか、というのはまだわかりませんので、おそらくはこれから研究者も含めてリサーチを開始すると思われる。

山本氏：

ありがとうございました。続いて黒須先生のお話しに移りたいと思います。地域スポーツの観点から、ということでお話しになりました。黒須先生のこれまでの経歴、全国の総合型地域スポーツクラブに対して造詣が深いというバックグラウンドがよくわかりました。ご自身も非常に厳しい環境の中で行動をされたということについて高い敬意を表したいと思います。会費収入が見込めないというのが

実はかなり大きな問題なんですけれども、こういう状況の中でお金のことを口にするのがややもすると前に出しにくいっていう環境があると思うんです。これスポーツの持続をするために大変重要な問題だと捉えております。気持ちだけでは動けないというのが実情なのに、気持ち以外のことを口にするのがはばかれるという風な心理に陥ってしまいがちで、ここを指摘していただいたことは大変に意味があったと思っております。それぞれの総合型地域スポーツクラブの活動も具体的にご指摘いただきましたけれども、私ここでも感じますのは総合型、つまり文化的な活動をしているクラブが、ある意味その文化的な活動をスポーツとともに現地に持ち込んで、ニーズにこたえていると、そういう実態ですね。単一ではなくて、複合的なものを持っているからこそそのバリエーションといいますか、その評価というのは改めて試してみてもいいんじゃないかと思えます。いくつもの実際の活動をご紹介いただきましたけれども、総合型クラブが訪ねていったところに社会的なネットワークが生まれていくのは重要なんですが、そうしたクラブ間の中に、もっと濃いネットワークがあるのかとか、たとえば、地域と地域外というネットワークはあったとしても、地域外同士のクラブ間にしっかりとしたネットワークがあるかどうか、こういうものは大変必要なものだと思います。ある総合型のクラブが、富山県から支援に行った、その情報を得て、福井県のクラブがその次に行くとなったときには、継続性ということが必要ですから、当然情報をもらってつないでいく、バトンを渡していく、そういうネットワークも必要になってくるんだろうと思います。おそらく黒須先生のことですからそういう状況に手を伸べておられると思うんですが、この地域外、地域内ではなくて、地域外、地域外、つまり被災地以外の横の連携が支援を厚くできるような情報交換をしているかどうか、この

指摘は一つしておきたいと思います。それからコミュニティービューロー、事務所を開設する、という提案、これも非常にすぐれた指摘だと思います。ただ、難しいのはこうしたビューローをつくるどころまではいってものに運営していくかということになるとある時に急にブレーキがかかってしまうことがあるんですね、ここは警戒しなければならぬと思います。黒須先生にうかがいたいのは、総合型地域スポーツクラブ、特に地域スポーツの果たすべき役割ですね、これが震災前と震災後で変わってきたのか、あるいは変わらなければならないのかこのあたりはどんなお考えでしょうか。

黒須氏：

はい、発表の中でも少し触れさせていただいたんですが、今回も電気がないとなにも使えないとかガソリンがなければ車も無用の長物ようになってしまふ、というようなモノの文化のもろさとか虚しさを実感した人が多かったのではないかと思います。こうした中で、地域のスポーツクラブが被災地を支援していく中で、助け合いと支え合いとかやはりモノの豊かさを求めるばかりではなくて心の豊かさを求めることが本当の幸せにつながるのではないかということを、言葉ではなくて行動で示したのではないかと、というのが一点目の地域スポーツクラブの役割ではないかと感じました。2点目が、社会的なネットワークという言葉を使わせていただきましたけれども、今回の震災によって異なった年齢の人や異なった社会層の人が一つの場所に引き合わされるきっかけになったと、しかしこれが日常生活に移っていく中で、社会的ネットワークを構築して広げていくという役割を、決してスポーツだけで行うというわけではありませんが、スポーツがもつ、人と人、組織と組織をつなぐ接着剂的な役割が今回、実践活動から見る事ができたという意味でのこれまでの

地域スポーツクラブが果たしてきた役割と震災後の果たしてきた役割の中で私がお伝えできるのが、一点目が価値観の転換に対して行動で伝えてきた面があるのではないかと、2つ目が、社会的なネットワークというものをこれから作り上げていく上でのスポーツの役割というものを見直していく必要があるのではないかと感じております。

山本氏：

ありがとうございました。私は総合型地域スポーツクラブが被災地に入って行って、何らかのアクションをした時に、一回戻ったその段階で、その総合型地域スポーツクラブ内での必ず総括をすることだと思うんですね。総合型地域スポーツクラブが被災地に入って自分たちが変わるところという契機にしなければ、被災地でのアクションを自分たちのものとしてプラスで上積みしていくことは出来ないと思うんです。与える活動ではなくて自分たちもそこで変わっていくひとつのきっかけにと強く思う次第です。

3人目の間野先生からは、アスリートによる社会貢献の視点からという話でした。アスリート、人々に夢や希望を与えられる稀有な人々、まさにその通りだと思いますね、しかもその特定非営利活動法人の長い活動がそれぞれのアスリートのバックグラウンドにあるという指摘、これも我々良く知らなかったことではなかったかと思います。世界で戦ってきたアスリートにはですね、いわば半透膜のようなものがあるんですね。半透膜というのは、一般の人から見ると透明なんです、よく見えるんです。あー柳本先生あなた日本酒が好きでしたね！みたいな感じで、人は知っているんだけど柳本さんからするとあなた誰ですか？という状況ですね、言ってみれば半透膜なんです。ですからアクションを起こす側はそこにいる人たちの心境とか意向がよく分からないんです。これをスムーズに展開し

ていくためには当然事前の情報っていうのが必要だと思いますし、現地の方の意向を伝えていくことが求められてると思うんですね。間野先生の作られた組織が、調査を重ねながら、次の活動の方向を探っているのは、大きな見えない力になって働いていると思います。それから、大変魅力的な組織なんですが、先ほど申し上げたように、この組織を作るのにもエネルギーが必要だったと思いますが、これを持続させるためにはその3倍4倍のエネルギーが必要だと思うんですね。他の競技団体の例を申し上げますと、全日本野球会議という非常にすぐれた組織がオリンピックに出場する段階でできました。ところがいま、この活動はほとんど停止状態です。それは、野球というスポーツがオリンピックから外れてしまったという一つのきっかけを境にして、活動が止まってしまっているわけです。今回の震災が、段々と元の状態に戻って行った時に、この活動が止まってしまわないようにぜひとも大きな支援をスポーツ界全体でしていきたいと私は考えています。それから、アスリートの方の中には得手不得手というのがあるかと思いますが。たとえば指導者を指導するのは非常にすぐれた人、でも小学生に会うとなかなか言葉が出ない人、いろんな方がいると思います。こうした方々の適材適所をする、っていうことがアスリートの方にとっても大きなポイントだろうと私は見えています。あとは、競技団体とのコラボレーション、これがなかなか厄介なところがあるかと思っています。これについても、まったく畑の外だという風に考えていますと、どこかで頓挫する、あるいは錆が出てくることがありますから、気をつけなければならないと思っております。そこで地域の自立というテーマが一つのポイントになっていると思うんですが、これ間野先生にうかがいたいんですが、柳本さんご自身も映像のなかでおっしゃっていましたよね、地域の自立のために、その自立を助

けるんだという風におっしゃっていましたが、自立とアスリート、どんな風に関わっていけばいいのでしょうか。

間野氏：

アンケート調査の中にも、総合型地域スポーツクラブと狭く捉えると、黒須先生の話をお聞きし、総合型地域スポーツクラブが元気になると強くなると地域が再生できるという仮説に乗っかるとすると、総合型地域スポーツクラブをどうやって再生して自立するのか、そこにアスリートがどのように貢献できるのかが重要となります。3月から4月の更新の時に会員を更新しないでやめた方が相当数いたと聞いてます。そういった方をもう一度呼び出すきっかけにアスリートがつながるとかですね、会費を払ってもいいと思わせるような、アスリートが来るからまたクラブに入ろうよという、こんなことでつながっていただけらいいんじゃないかなと思ってます。

山本氏：

それだけ強いエネルギーを持っていると。

間野氏：

ええ。その半透膜ですけれども、半透膜は僕から見ればオーラでして、一人来るだけで周りの雰囲気は全く変わるんですね。これは私がずっと高校野球もやってましたけど、甲子園にも行けなくて、野球でいえば僕は完全な落ちこぼれなんですね。プロ野球の選手は天才なんですよ、僕たちから見ると。やっぱりアスリートって天才なんですよ。そういうオーラ、魅力、力つてものは、総合型地域スポーツクラブの再生にも必ず役立つんじゃないかと思っています。

山本氏：

ありがとうございました。わたくし3人の先生方の話を伺っておりまして、この3人の

先生方がされているアクションは、震災復興という大きなターゲットのもとに行われてきましたけれども実はこれスポーツ界が本来すべきことを震災復興の現場でやっているにすぎないんじゃないかと思いつけているんですね。この行動は、ほんとは日本全国津々浦々で、ずっとやっていかなきゃいけないことなんです。そういったことを、行って戻ってきたときに改めて自覚するというのは重要なポイントだと思いました。しかも、スポーツに言葉はいらなないと言いつながら、震災復興の地に行くと、言葉の力があるんですよ。そうした現実には、被災地のみならず日本の隅々にあるということだと思います。震災復興がある段階まで進んだときに、スポーツは日本の他の地でまだやっていかなきゃいけないことがあるんだ、被災地支援に回った先生方の活動は、そういう思いに至らしめてくれる一つのきっかけになったのではないかと思います。どうもありがとうございました。

長ヶ原氏：

ありがとうございました。かなり具体的なところまで掘り起こして頂いたのではないかと思います。それでは続きましてコメンテーターの成田先生、コメントとご質問を一緒にお願ひできればと思います。よろしくお願ひいたします。

<成田氏から演者への質問>

成田氏：

私の場合はやはり車いすに乗っているのですが、今回のような震災が起きたらどうなっていたらと自分に置き換えて3人の先生のお話を聞くことができました。実際障害を持っておられる方も地震の被災にあわれて、苦勞をされてる方が多くいらっしゃると思うんですけども、残念ながらニュースで障害者の洋式のトイレが足りないとかお風呂に入れないとか、そういうものをなかなか見ることが出来なかったのです。逆にそういう障害者の団体が被災地に向かって行ってトイレを仮設したり、お風呂場を作ってあげたり、そしていま被災地で車いすで生活している人はスロープはついていてんですけどトイレに入るのに段があって生活ができないとか、結局家の中に閉じこもってしまう方が多いと思うんです。そこでまずは仲野先生にお聞きしたいんですけども、大学の総合力をいかしてこそ、障害者のフォローもお願いしたいと思うんですが、そういう障害者の情報は先生の方にどのくらい入ってきているのか教えていただきたいと思います。

仲野氏：

はい、障害者の方の情報ということですが、本学には健康福祉学科という学科がありまして、その教員のネットワークがかなりありますので、学生をそういうところに派遣してました。ある程度そういう情報の入手はできていたのではないかと思います。あとこれは新聞で見たんですが、障害者支援のNPOもけっこう宮城では活動していたみたいですので、そういったところからも今後我々も拾い上げて支援をしていきたいと思っております。

成田氏：

はい、このような機会があれば障害者の方

の話も1分でもかまわないので皆さんに伝えていってほしいなと思います。

仲野氏：

もう一つ付け加えると、わたしはスペシャルオリンピックスという知的障害者の方のボランティア支援を15年ほどやっているんですが、やはり震災後活動場所がないということで、活動場所の支援ということでいろんな関係機関に投げかけてもいますので、いろいろ幅広くやっていきたいと思います。

成田氏：

よろしくお願いたします。あと、黒須先生にお話しをお聞きしたいんですけども、テレビでニュースなどを見て、とにかく私ものなにかしたい、という気持ちがあっても、車椅子の私が被災地に行ってみたところで、まず車椅子のタイヤがパンクしたらもう自分は動けない、かえって私はみんなの迷惑になってしまう、じゃあなにができるかって考えた時に、神奈川県相模原市と、宮城県の気仙沼市が姉妹関係にあるということで、スポーツアカデミーの気仙沼の選手を10人チャリティスイム大会に呼んで相模原のプールで元オリンピックの選手も呼んでみんなで泳ぎましょうっていう試合をやった時に、ほんとに選手たちが一か月ぶりに泳ぐことができうれしかったと、また引率してきたコーチもまた当分泳げないから思う存分泳げって言っていたことが印象に残っています。なので、いま私になにができるのか、黒須先生にお聞きしたいんですけども、やっぱり寄付金を送るとかそういうことではなく、自分が、たとえば福島大学に行って、私がいける状況であって、地域の子どもたちを呼んで、一緒に泳ぐことが可能なのかとか、今の私に出来ることがあれば、先生の方から教えていただきたいと思います。

黒須氏：

震災が起きた後に、被災したクラブに届けたい、伝えてほしいメッセージとして、全国のクラブ関係者が、がんばらないでください、今は我々に甘えて下さいということになにか出来ることはないか、という問い合わせがありました。例えば宮城県の七ヶ浜にあるアクアゆめクラブの現状を調べた時に、家が全壊した子供たちの 21 名がクラブをやめてしまったクラブの更新をしなかったという情報がすぐに入ってきました。じゃあこの 21 名の子供たちが 1 年間活動するためには、月会費いくら、かける 12 というお金を、全国のクラブから寄せられた義捐金を使ってくださいという形でお互い助け合うというところに行きましたし、あと総合型地域スポーツクラブの目指す一つが、ボーダレス化したスポーツ環境というか、よくふたこぶラクダなんてことを言われるんですが、たとえば学校でテストをすると、80 点をピークとした大きな山と、あと 30 点をピークとした小さなやまに分かれると。スポーツも同じだと思うんですね、上手な子、下手な子、足の速い子、遅い子、の後者になかなか目が行き届いてなかった、健常者、障害者という分け方もできると思います。そうした中で、ぜひボーダレス化したスポーツ環境をつくるというメッセージを成田さんに、被災地の学校とかですね、クラブに来ていただいて子どもたちに夢を語って頂ければすごく励みになると思いますので、ぜひセッティングも私の方でしますので、よろしくお願ひします。

成田氏：

はい、ぜひよろしくお願ひします。間野先生にお尋ねしたいんですけど、お話を聞いて共感できるところがたくさんありました。これからもたくさんのプログラムを提供して欲しいなと思ったんですが、この会場に来ている先生方もご存じだと思うんですが、

オリンピックとパラリンピックの管轄の違いに気づいてらっしゃる先生もたくさんいらっしゃるとお思います。オリンピックの管轄が文部科学省で私たちのパラリンピックが厚生労働省という、そういう大きな管轄の違いというのは実際パラリンピックの選手としてもすごく残念だな、と思うところがあります。先生にお聞きしたいのは、近い将来スポーツ庁ができた時に、パラの選手がスポーツ庁に入って当たり前という考えなのか、やはり管轄は違うべきなのか、先生の個人的な意見をお聞きしたいなどお願ひします。よろしくお願ひします。

間野氏：

はい、スポーツ基本法が出来まして、ここでは障害者スポーツもついに法律の中に入りました。新しい省なり庁なりが出来た時には、パラリンピアンの方々が、そこでオリンピックと一緒に活動していくのは当然だと思っています。アスリートによる社会貢献って言ったときにも、パラリンピアンの方も考えました。NPO の中に、パラリンピックに参加した方も自発的に参加されてました。一緒に行きたいと気持ちはあったんですが、成田さんがおっしゃったように現地でのパンクですかそういう不安をお持ちだったと。でも徐々に道路なども復旧してきていますので、これからはオリンピック・パラリンピアン、そういうエリートアスリートの人たちが共に手を取り合って、被災地復興、こういう活動ができればいいと思います。

成田氏：

どうぞよろしくお願ひします。ありがとうございました。

<フロアから演者への質問>

長ヶ原氏：

コメンテーターのお二方はこの後のディスカッションにも参加して頂きますのでよろしくお願いたします。ということで口火を切って頂きましたが、次はフロアの皆さんからご質問、コメントをいただきたいと思いますので、時間は20分少々ありますので、よろしくお願いたします。

山下氏：

東海大学の山下と申します。このシンポジウムに参加しまして、来てよかったと思えました。素晴らしいシンポジウムの企画、本当にありがとうございます。他のところに行こうか迷ったんですけども、こっちに来ました。本当に勉強になりました。仲野先生、わたくし体育部長をしておりますので、先生の発表や発言、東海大学の果たすべき社会的役割、社会的貢献、ぜひ参考にさせていただいて、今後の大学としての行動に反映していきたいと思えます。

そして黒須先生。わたくし神奈川県体育協会の会長をしております、そういう意味でも総合型地域スポーツクラブ振興、大変大切な問題だと思っております。ここで総合型地域スポーツクラブの新たな可能性や役割、このようなお話をいただいた、これもですね今後の神奈川県体育協会の会長としての行動の中にぜひ参考にさせていただきたいと思えます。

間野先生、私議員になりませんで大変申し訳ありませんでした。先生に一つお聞きしたいんですけど、多くの人を動かしていく時に、山本先生のお話しにあったんですけど、日体教、オリンピック委員会、これとどう関わっていこうと思われているのかそれをお聞きしたいんですね。私もNPO活動をやってみて、いろんな人からいやあ山下君、いいことやっ

てるねーってよく言われます。お酒が少し入りますと、ここに柔道関係者がいないという希望的な想定でお話ししますが、私が中心になっている人々に協力してもらってやってるこのNPOは、一個人がやるべきことですか？本当は連盟がやるべきことでは？だから、今は細々とやってるけど、もし私が中心になったら、この10倍20倍30倍、やりますよ、お酒が入らない時に言われるんですけど、まだ昨日の焼酎が残ってるみたいですけど、日体協が、各県の体育協会と非常にかかわりがあります。JOCは多くの競技団体との関わりがあります。ですから、こういった素晴らしい活動をですね、大きく展開していくためには日体協、あるいはJOC、そういったところと関係を持ちながらやっていくとより多くのスポーツ関係者の力を巻き込んでいけるんじゃないかな、そのところをどういう風に考えておられるのかをお聞きしたいと思っております。で、事務局維持していくの大変だと言われました。私もすぐ賛助会員になります。ここでいい活動してるな！と思われた方もぜひ会員になっていただいて、こういった組織が善意で、熱意でやってる組織が長く続いて、スポーツの社会貢献活動に発展していくためにですね、微力でも集まっている人で協力していければなと思っております。よろしくお願いたします。

間野氏：

ありがとうございました。賛助会員ではなくてぜひ議員になっていただきたいんですが。3月にお声かけした時は振られまして、そのあともう一度声かけてまた振られまして、ずっとラブコールを送っているんですけども。体育協会、JOC、ここはずっと日本のスポーツを支えてきておりますので、そこが中心になってやっていくのは当然だと思っております、ただそれでも足りないところがあればこの会議で、つまりいろいろな団体がいくらで

もやってもきりが無いぐらいたぶん現地の人たちは求めているんじゃないかと思っておりま
す。ですので今いただいたアドバイスのように
決して対立したりそういうことがないように、
一緒に協力できることはやってまいりたい
と思っております。体育協会とサッカー協
会と一緒に学校で授業にアスリート
を派遣する、JOC は各県でミニオリンピック
を開催していくと、その隙間として総合型地
域スポーツクラブが残っておりますので、こ
ういったところを中心に私たちの会議ではア
スリートプログラムを提供できればと思っ
ております。ぜひ、この機会によろしくお願
いします。

山下氏：

日体協も JOC も少しずつ社会的役割につ
いて考えて行動するようになってきてると
思いますね。先生のところでやられている
ところでは出来ない、しかし日体協や JOC
ならやれるんじゃないかな、こういうこと
もありましたらぜひ提言して頂きながら、
素晴らしい活動ですから、リンクしなが
らやっていければいいなと思っております。
3 先生のこれからの活躍を記念して
おります。ありがとうございました。

長ヶ原氏：

山下先生、本シンポジウムを選んで
いただきましてありがとうございました。
アスリート体育の話もかなり前に進
んだと思いますが、被災地の子ども
たちも山下先生から抑え込まれたい
と思っておりますので、ぜひ間野先生
と被災地の方で協力して頂ければと思
います。

藤原氏：

日本オリンピック委員会理事の藤原
でございます。山下先生にもう一言、
これはむしろ山本先生にうかがいた
いんですが、さきほど、間野先生の
活動のようなものは命令型でなく

依頼型である、そういうネットワー
キングの必要性が、中央制御、とい
う言い方はおかしかな、コントロー
ルタワーは依頼型でなければならない。
山下先生がおっしゃったように、
体協や我々 JOC がやるとどうしても
命令型になりがちである。そのなか
で、我々 JOC ができる支援という
かネットワーキングにどう関わる
べきかあるいは何ができるとお考
えかというお話を山本先生にうか
がたいと思います。

山本氏：

日体協や JOC が命令型であるのは
組織内のことですから、それはそれ
で妥当性があるんですね。つまり、
JOC が競技団体との契約関係とい
いましょうか、命令形であっても
いいという前提がある。たとえば
体協が県の体協とはそういう関係
にあるわけですから、命令型で
いいわけですね。命令型の感覚、
空気そういうものを違うところに
そのまま持ち込むと受け入れて
くれなくなる、あるいは一回受
け入れた顔をするけれども、あ
とで吐き出されてしまうことが
あるんですね。その辺りを JOC
も日体協も都道府県や町村の
体協の人たちがどう受け止めて
いるかっていうのをちゃんと
自分たちのところに返しなが
らやっていける、そうならば
少しスムーズになるんじゃない
かと思います。さっき山下先生
がおっしゃったのは、いまそう
いう時代に来てる、というご
指摘だったと思うんですね。
そういう意味で言いますと、
アスリートの方々と、実は
学校の先生たち、あるいは
体指の先生方、こういう人
を巻き込みながらやって
いくのが本来のスポーツ
のあるべき姿なんじゃない
かなと思います。

山下氏：

今の関連です。こしよろしい
ですか。神奈川県
の体育協会の会長
ですけれども、
県には全ての
競技団体と市
町村の体育協
会が入ってま

すけども、決して命令型ではないと思ってます。県体協の本部には、何の力もないと思っております。ただ、加盟団体、競技団体と各地域の体育協会、これが心をつににした時に大きな力になる。だから上下の関係じゃなくて、協同の関係である。だから、日体協にしても JOC にしても、協同の関係で太いパイプを作って頂く、そうすると大きな力になっていくんじゃないかなと、命令型でやってる間は、その力はあくまで限定的なものになってしまうんじゃないかなと思いました。

長ヶ原氏：

ありがとうございます。支援についての課題、そういうところにも触れていただきました。

山口氏：

神戸大学の山口です。3名の先生方の発表大変感銘を受けました。迅速でバイタリティあふれるサポートに、大変感銘を受けました。今回のシンポジウムは復興支援の中でスポーツの社会的役割と可能性を再考しようということですが、おそらく今回の学会のテーマもそうだと思いますけれども、する・みる・ささえるところの、ささえるスポーツの可能性が高まって、高まっただけやなくて実現したと、実現しているということではないかなと思って聞いておりました。いままで支えるスポーツと言いますと、立国戦略の中には、する・みる・ささえるの観るは漢字で、支えるも漢字やったんですけれども、今回の学会のテーマは全部ひらがなですけれども、私はひらがなの方がいいと思ってるんですけど、漢字にすると、観るは観客の観しかないので、新聞みたり、スポーツ報道みたりとかいいと思うんですけど。ささえるスポーツというと、いままでどちらかというとボランティアの個人を考えていました。主に。ところが、3名の皆さんの話を聞きまして、

スポーツボランティア団体と申しますか、団体によるサポート、支えるということが今回の特徴ではないかなと感じています。それでは3名の皆さん、なかなかすぐには動けないと思うんですが、いままでの積み重ねがあって活動が出来たと思うんですよね。例えば宮城は非常にスポーツボランティア団体が多くて、仙台大学でもされてますし、黒須先生もクラブネッツでいろいろマッチングされてますし、いろんなそういう蓄積があってそこに来たと思うんです。そのことをちょっと話して頂きたいのと、それから継続していくための今後の課題、必要があれば言って頂ければ我々も参加できると思いますので、よろしくお願いします。

黒須氏：

総合型地域クラブが目指す一つの姿が、住民が自主的に地域のスポーツを支えていく、一人ひとりで支える、もしくは地域全体で支える中核的な役割を果たしましょうということに対して今後どう向かっていけばいいのかが私は課題だと思っておりますけれども、今回被災したクラブを訪ねた時に、2つにわかれた現象を目にしました。まず、住民主体で立ち上がったクラブの中心となった方がお話しされるのは、時間と場所さえあれば活動は再開できるんだという形で会員の人たちに呼び掛けながら、子どもたちのスポーツ活動を行ったりとか高齢者の方に健康体操を提供しているというところもあれば、一方でいわゆる行政主導で立ち上がったクラブは、体育館やグラウンドがなければできないと思ってしまうと、いまだに休止したままであるということで、総合型クラブがということでひとくくりできない、住民が自分たちのことは自分たちで考えようという住民主体のボトムアップ型のシステム作りの核になっていかなければいけないということと、この震災でいろいろと地域コミュニティと地域スポーツの再生

を同時に進めていく中で、私は総合型クラブの万能論というお話をしているつもりはないんですが、これまでのスポーツシステムでカバーできなかったところを補っていく、それがスポーツを通じた地域づくりという点で今回大きく注目されてきていると思いますし、話しが前後してしまいましたが、クラブネッツというのを1999年に立ち上げました時に、自分たちがまずNPOを取得して、そのメリット・デメリットをクラブに伝えながら、クラブが自立した運営をできるようにアドバイスができないか、ということで活動をしていった中で、今回の震災復興の始動が早かったということに着目して、先ほど報告させて頂いたということです。

仲野氏：

仙台大学というのは、1学部5学科という非常に小さな大学です。逆に言うと、非常にフットワークが軽い、それは最大の利点かなと思ってます。今回の件でも割ととっかかりは早く、こういう風にしようといったらあまり時間がかからずに組織ができた。まずはそういう利点があったのかなと思ってます。あと、大学自体が日ごろから地域に貢献するというのを重視してる大学ですので、それぞれの学科にもそういう意識があるし、大学全体にも地域貢献という一つの大学の使命というのが日ごろからありました。そういうところでも私たちは動きやすかったかなと思ってます。これはおそらく大学の規模が大きくなればなるほど動きにくくなる部分も出てくるかなと思いますので、大学全体でなくても例えば学部単位で動くとか、いろんなやり方があるかなと思ってます。やはりことが起こった時に大学を挙げて動かないと積極的な支援は難しいのかなと思っております。

間野氏：

私は2002年に早稲田大学に移りまして、ち

ょうど10年目で、その前の11年間三菱総合研究所でサラリーマンをやっていました。1995年に総合型地域スポーツクラブ育成モデル事業が始まりまして、調査研究を文部科学省から業務受託し、総合型地域スポーツクラブを15年間ずっと見てきている、そして1999年7月7日、クラブネッツを黒須先生と一緒に立ち上げた、こんな経緯もあります。もう一つは1998年12月にNPOが出来た時に、日本で第一号のNPOを作ろうということで、女性のスポーツを振興するジュースというのを立ち上げました。以来、NPO、すなわち非営利活動というものに携わってきています。うちの奥さんには休みの日にもおカネ出してボランティアをして馬鹿なんじゃないっていわれながらも、ずっとこうして非営利活動は大事だと思ってやってきたということは今回の背景にあると思います。それと同時にアスリートに関して言いますと2004年にプロ野球OB1400人にアンケート調査をさせてもらいました。その時に、引退した人の80%が野球を教えたい、お金の問題じゃない、引退した後もそのスポーツに関わり続けたいとそういう調査をやったことがありまして、それは心の中に残っておりました。この機会に非営利活動とかアスリートのそういった思いだとか総合型地域スポーツクラブとかこういうことがうまくつながらないかなということもずっと考えていて、たまたまパッと出て、いろんな方々にアドバイスもらいながら進んでいるという状況です。今回若い方もたくさんいらっしゃいますので、私も奥さんに馬鹿だとか言われながらやっぱり大事だと思う事をきっちり続けて、早くから信念を持って継続していくことは何か役に立てることがあるかもしれないなど、こういうことができるってことが、私自身すごい幸せだと思ってます。たぶんみんなこの世の中何とかしたいと思っています。思っているけどできない人が多いと思います。私が始めた活動は、まだ小さな活動で

すけれど、自分の信念や思いを形に出来たってことは、私自身、大変に幸せ者だと思っています。

長ヶ原氏：

まだ質問あるようですが時間が矢のように過ぎまして、残り5分を切ってしまいました。最後にお二人のコメンテーターから短いファイナルコメントをいただきまして、この会を終わらせていただきたいと思いますが、よろしいでしょうか。

山本氏：

期せずして3人の先生から今回のこのアクションは長期的なスパンでやらなければいけないんだという指摘がありました。的を射た指摘だと思うんですが、実は元来スポーツというのは長期間を要するものなんですね。行ってちょっとアドバイスしたから状況がよくなったとかっていうのは極めてまれなケースだと思うんです。その意味で言いますと、長期戦になるということは当の昔に覚悟しておかなければならない、覚悟というかそれが普通なんですね、それについて躊躇する、となったとしますとそれは対象となってるのが自分のチームじゃない時なんです。私のチームなら長期間でも戦えるんですけど、その一緒にやってる人が私のチームじゃない時にはなかなか長期間でいかないんです。となるとどうすればいいかっていうのは皆さんご指摘の通りやっぱり自立をどう救けるか、というところに行きつくと思うんです。震災の現場が普通と違うのは、3つのポイント、疲れないようにやれるかどうか、いく側も受ける側も疲れないでやれるかどうか、これ非常に重要なポイントです。二つ目は経済的なものをちゃんと考えておくということですね、それから三つ目、ちゃんと時間を考慮しないといけないんです。我々は時間がないんだから、忙しい中で来たんだからみんな集まってくれっ

てんじゃこれは話にならないんです。私のチームだったらこういうことはできるんです。いついつ来るから集まれってことができるんですけど、そうはいかない、これが被災地の特徴だと思いますよね。こういった活動で得た経験を積み上げていかないと、きたるべき都市型の直下地震あるいは東海地震、東南海地震の時に、広大な被害を受けた時に再びスポーツ界が立ち上がる材料を持ち合わせないってことになってしまいます。ぜひとも震災で動かされたみなさん、動いている皆さんの英知をそのままうまく積み上げていってスポーツ界全体の財産にしたいと思います。

長ヶ原氏：

では成田先生お願いします。

成田氏：

私は子供たちに夢を持ち続けてほしいということを常に思っています。ですから私は水泳を通して子供たちになにかを伝えていきたい、そしていましかできないこと、今だからできることをしっかりしていきたいと思っています。震災に関しては、当然忘れることもできないし、これから私たちが助けていかなくてはいけないことがたくさんあると思うので、この会場の中にいる人たちすべてが置かれた立場を考えながら元気になるように暮らしていくことも大切だなと今日はとても感じる事ができて良かったと思います。ありがとうございました。

長ヶ原氏：

ありがとうございました。以上、コメンテーターの方からのファイナルコメントまで含めまして、今日はそれぞれの受け止め方、個人的に心に残ったフレーズであるとか考え方というそういう気づきもあったんじゃないかなと思います。半年経って、いろんなことがこのシンポジウムでもわかりましたけれども、

ことの大きさを考えますとまだわからないこと、悩み続けていくことはかなりあると思います。そういう悩みというものを分科会、学会でシェアしながら、学術的な支援、研究的な支援を学会がどうやってできるのかということも考えていかないといけないと思いますので、ぜひ次回も話されることを願っております。ですから東海大学もぜひ、このテーマで大々的にやっていただいてここにいる出席者全員参加しますので、ぜひよろしくお願ひしたいと思います。

今日はコメンテーターの方々、パネリストの方々に頼り切ったシンポジウムになりましたけれども、震災直後の4月という時期にこのシンポジウムの内容をお話しして協力を求めたところ5人とも快諾して頂きました。大変な状況でお受け頂いて準備されてそれから今日は貴重な報告をいただいたことに心から感謝を申し上げたいと思います。では最後は5人の皆さんに感謝の気持ちを込めまして拍手で終わりたいと思います。それでは以上でシンポジウムを終了したいと思います。

9月26日（月）9:30～12:00 / 205教室

スポーツの社会的役割と可能性の再考：スポーツによる復興支援の中で

司会・コーディネーター：長ヶ原 誠（神戸大学）
北村 尚浩（鹿屋体育大学）

指定討論者：山本 浩（法政大学）
成田真由美（日本テレビ放送網株式会社）

東日本大震災はわが国のスポーツにも大きな試練と転機をもたらしている。広範囲に及ぶ被災地での人的、組織的、物理的な損失は、日常の地域スポーツ活動やそれを支える社会的基盤を一瞬にして奪い去り、国内の他の地域や自治体においても、多くのスポーツ大会やプログラムが中止や延期を余儀なくされ、スポーツに関わる興行的活動の自粛や、スポーツ行政の停滞、スポーツ産業の縮小への不安等、その影響の大きさは図り知れない。しかし、そのような逆境の中でも、スポーツを通じた復興支援の機運は高まっている。被災地におけるスポーツ関係団体・個人による被災者救援や復旧支援、地域スポーツ資源を活用した避難・ケア支援、チャリティイベントの開催やアスリートによる義援金寄付や募金活動に見られる財政支援、被災者に対して直接的にスポーツ活動の機会や経験を提供するボランティア支援等、スポーツを通じた復興支援による様々な社会・地域貢献や先駆的アクションが生まれている。

「スポーツによって何ができたのか」、「スポーツによって今後何ができるのか」、スポーツに関連する専門分野、特に社会学の領域においては、これらのことを問い、議論し、共有する場が今こそ望まれる。本体育社会学分科会では、分科会員による被災地からの報告や復興支援に携わる情報提供者からの知見に基づき、スポーツの果たすべき社会的役割とその可能性について再考しながら、今後のわが国のスポーツ振興に向けての新たな視座や将来ビジョンを共有したい。

教育機関・ボランティア組織の視点から

仲野 隆士（仙台大学）

震災復興関連のボランティア活動は、日々変わる被災地側の要望に対する派遣側とのマッチングが極めて重要である。受け入れ側は、ボランティアの采配で困惑することが多いという。同様に、派遣する側も要望に対するマッチング作業に四苦八苦することが多い。その点において、総合大学や体育系大学は様々な要望に対し、専門的な対応が可能である。また、人数調整もさることながら特に需要が高い平日の派遣も可能という利点がある。仙台大学も5学科の特性を最大限に活かし、力仕事、健康相談、運動指導、食事提供、支援物資の仲介という5つの活動内容を設定し、教員と学生、更には職員も介入して被災地の復興に向けて活動を展開している。一方、教育機関に近い都道府県のレクリエーション協会も多くの関連団体が加盟しており、被災地でのスポーツや遊びなどに対する要望に細かく対応することが可能である。

このように、極めて広範囲の被災地の要望に対応するためには、大学を中心とした教育機関や関連機関が組織として対応することが肝要であることが分かってきた。震災復興ボランティア活動は、数年間という長期スパンを視野に入れて展開するという認識も教育機関には存在する。本シンポジウムでは、近隣大学やレク協会におけるボランティア活動の初年度の取組事例を中心に報告したい。

地域スポーツの視点から

黒須 充 (福島大学)

国が「ヒエラルキー」や「権力」といった行動の論理によって統治されるのに対し、市場は「競争」と「交換」によってその機能を果たしている。第3セクターの組織である地域スポーツクラブでは、一方でその制御に関して利他的な相互支援を意味する「連帯」が、また他方では社会的な意味、共同体的な意味、会員自身にとっての意味といった「意味」が行動の論理になる。岩手県北上市にあるNPO法人フォルダでは、クラブ内にボランティア組織「いわてゆいっこ」を立ち上げ、震災の6日後から、被災地に入り、炊き出しや、あるいは全国のクラブやスポーツ関係者から届けられた物資を被災地に届ける活動を積極的に行ってきた。また、現在も、運動指導、温泉送迎、コンサート、読み聞かせなど、積極的活動を続けている。

本シンポジウムでは、地域スポーツの視点から、「地域スポーツクラブは、会員の利益のために何かをやっていくということだけではなく、同時に社会の公的な利益のために活動していかなければならない存在である」ことを、NPO法人フォルダの事例等を中心に報告したい。

アスリートによる社会貢献の視点から

間野 義之 (早稲田大学)

アスリートは、人々に夢と希望を与えることができる希有な存在であり、特に子どもたちにとっては大きな憧れでもある。すでに多くのアスリートが特定非営利活動法人等の組織を立ち上げ、社会貢献活動を始めている。これらの組織が手を取り合い、アスリートたちが競技種目の枠を超えて集い、想いや目標を共有することで、さらに大きな夢と希望を人々に伝えることができる。これらのアスリートNPOsの中間支援団体として、「一般社団法人日本アスリート会議」が2011年4月に設立された。この会議は震災復興を契機に、アスリートの自発的な社会貢献を促進する仕組みとして、元日本代表監督経験者であり、かつ自ら社会貢献活動を組織化して行っている6名(井村雅代、王貞治、岡田武史、倉石平、平尾誠二、柳本晶一)が設立発起人である。主たる活動は、アスリートによる社会貢献活動事業の支援、アスリート情報の発信事業、アスリートNPO組織の連携促進事業、アスリートに関する調査・研究事業などである。諸外国でも、British Athletes Commission (2004年)、Australian Athletes' Alliance (2007)、European Elite Athletes Association (2008)などが設立され、アスリートの主体的な社会貢献活動が推進されている。

体育社会学専門分科会・シンポジウム 2011.9. 26
 スポーツの社会的役割と可能性の再考:スポーツによる復興支援の中で

教育機関・ボランティア組織 の視点から



がんばろう東北

仙台大学

仙台大学
 仲野 隆士

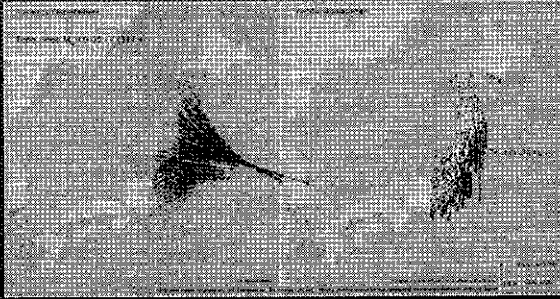


3.11・東日本大震災の基礎情報

発生時刻：2011年3月11日(金)14時46分18秒
 震源：三陸沖(牡鹿半島の東南東約130km付近)
 岩手県沖から茨城県沖までの南北約500km、東西約200kmの広範囲に及んだ
 震源の深さ：約24km(暫定値)
 地震の規模 モーメントマグニチュード (Mw) 9.0
 最大震度：宮城県栗原市:震度7
 地震の種類：北アメリカプレートと、その下に沈み込んでいる太平洋プレート間で起きた海溝型地震

東日本大震災

14:45から15:15までの30分間



水平方向のズレ(方向と距離) 垂直方向のズレ(主に沈下)
 牡鹿: 東南東方向に5.3m・下方向に1.2m移動
 宮城沖: 東南東に約24m(更に沖は約50m)・上方向約3m移動

東日本大震災の津波⇄



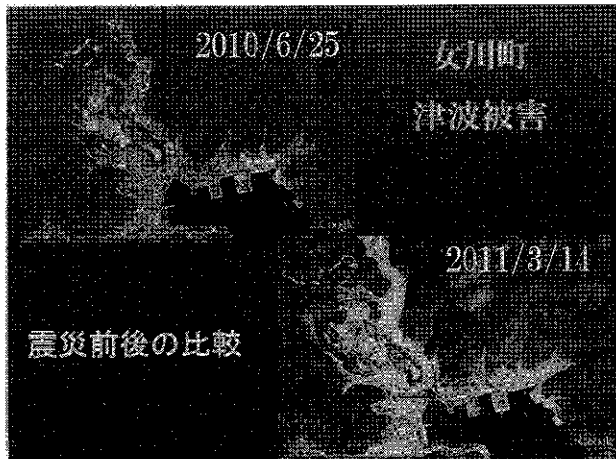
津波により浸水した面積は延べ約400km²に及んだという

2010/6/25

女川町
 津波被害

2011/3/14

震災前後の比較



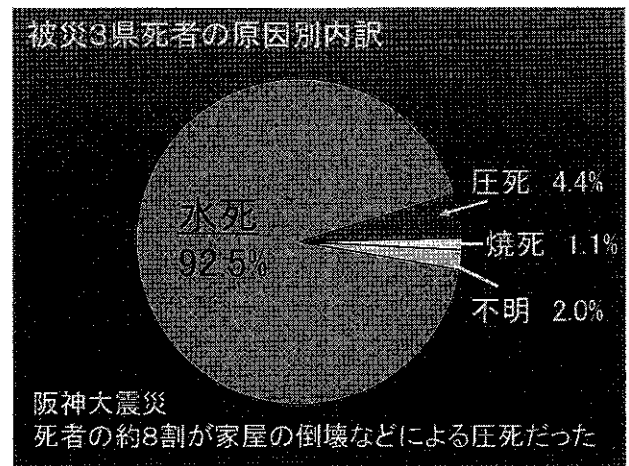
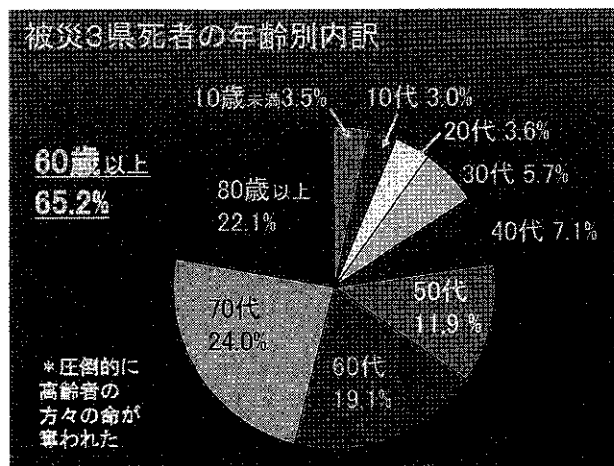
女川町の被災状況-1

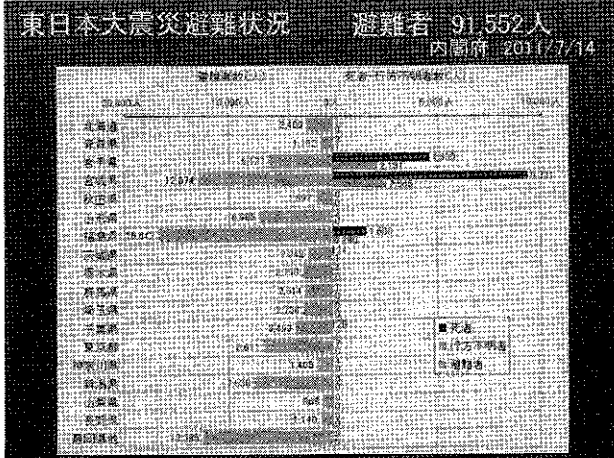




東日本大震災被害状況 2011/8/10 現在 警察庁及び各県まとめ

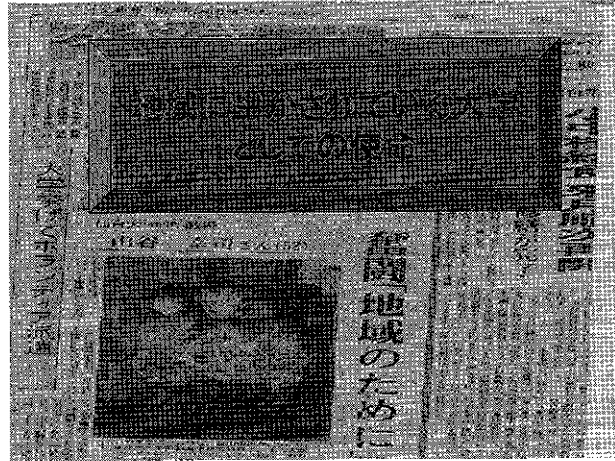
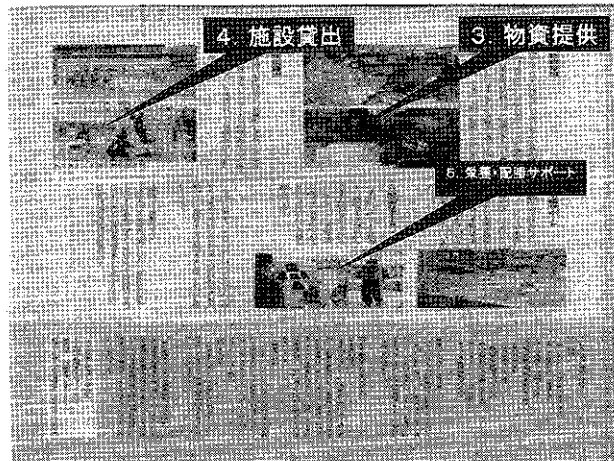
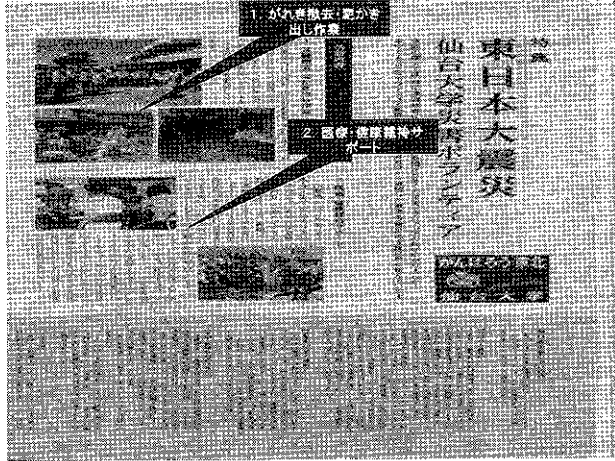
	死者	行方不明	全壊	半壊	道路崩壊
青森	3	1	307	854	2
岩手	4656	1692	21011	3484	30
宮城	9455	2185	68377	59777	390
福島	1603	241	16531	36216	19





**復旧・復興支援に対し、特に
地元の教育機関・ボランティア組織が
貢献すべき理由**

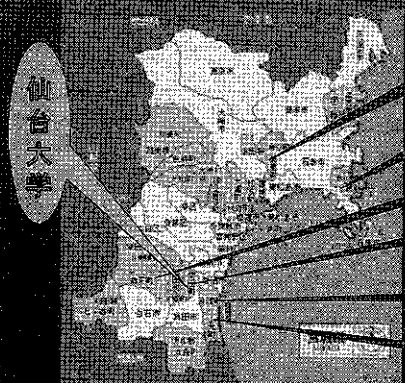
1. その土地・地域の人々の気質、言葉遣いなどがわかる
2. 日々変わる被災地側の要望に対し、組織的に専門的な対応が可能(特に復旧の段階)
3. 被災地側も、地元なので信頼もあり依頼しやすい
4. 移動距離や手段の関係で、需要が高い平日の支援も可能(*派遣する組織の派遣への配慮が不可欠)
5. 人数調整・調達も細かく対応することが可能
6. 派遣側と受け入れ側のマッチングの合意が得やすい
7. 地元ならではの手段や方法で支援することも可能
8. 長期のわたり復興支援を継続していくことが可能



平成23年度ボランティア登録者数 6月29日現在

- 災害ボランティア
 - 教員 91
 - 学生 622
 - 合計 713
- 災害ボランティア活動者数 (のべ人数)
 - 被災地支援: 138・353
 - 支援物資仕分け: 1・56
 - 仙臺中央病院: 8・20
 - 健康づくりサロナー: 114・152
 - おにぎり隊: 49・41
- 所属部活動と登録数
 - 柔道 35 剣道 19
 - バスケ(女) 18 バスケ(男) 26
 - バレー(女) 15 バレー(男) 35
 - サッカー(女) 19 サッカー(男) 66
 - 硬式野球 40 準硬式野球 1
 - 女子野球 4 卓球 2
 - ブレیکن 4
 - 合計 284

仙台大学ボランティア派遣先



- 奥里町
- 女川町
- 蔵王町
- 柴田町
- 置戸町
- 山元町

物資支援 全国から約200タンホール箱

仕分け作業



バスに満載し美里町に搬送



糧食調達

運動栄養学科が担当



毎朝6時からボランティア参加学生分を作成



瓦礫撤去、泥掻き(荒浜中学校)

津波の高さ



瓦礫の山




5時間作業後


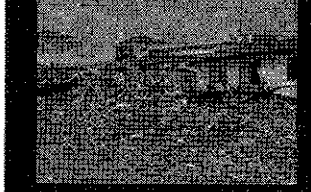



荒浜中学校周囲の被災状況

玄関横の漁船



7=ル脇の漁船



コロナ症候群予防の運動



女川、美里での運動指導



被災地に笑顔をお届けする
【笑顔! Again!】プロジェクト

被災地に笑顔をお届けする
レクリエーションボランティア活動!

公益財団法人日本レクリエーション協会は、東日本大震災で被災された方たちへ、レクリエーション活動を通して、こころからのケアを行うとともに、人とのふれあいを育むプログラムを実施しています。
また、子どもたちへはあそびやスポーツを通して楽しみながら身体を動かすプログラムの提供を行います。
多くの方々に笑顔をお届けする【笑顔! Again!!】プロジェクト、活動状況はこちら

被災地に笑顔をお届けよう!
被災地、支援のつなぐ活動。
被災地を笑顔で支える活動。

日本レクリエーション協会ホームページより

災害支援レクリエーションボランティアを養成

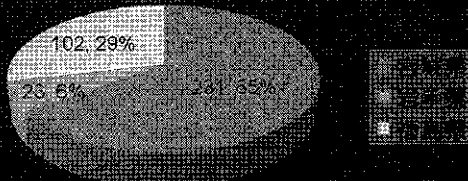
日本レクリエーション協会は、県内での活動を通じたボランティア養成を進めました。

研修では、「被災地の現状と課題」、「災害支援ボランティアにおける安全管理」、「高齢者と子どもの心のケア」等について学び、避難所等を想定したレクリエーション支援の実際やコミュニケーション・ワークなどを演習形式で学習しました。受講生はそれぞれの活動の展開案を作成し、実際の活動に備えます。そして後日、受講生は自分で作った展開案をもとに演習を行い、実際の避難所での実習を行いました。

日本レクリエーション協会ホームページより

宮城県・岩手県・福島県レク協会の震災復興ボランティア活動状況(活動回数)

レク支援活動数



震災発生～8月末・東北3県のレク協会のレク支援活動総数 N=956回

レク支援活動内容の特徴と変化

<震災発生～6月末>

1. 支援準備活動(現地への挨拶と打ち合わせなど)
2. 被災者に寄り添う・話を聞く(レポートの形成)
3. アイスブレイクゲーム(雰囲気作り・交流の演出)
4. 簡単な体操やストレッチ(エコノミクス症候群予防)
5. 手遊び・室内ゲーム(コミュニケーション重視)

<7月以降～現在>

5. 集団ゲーム・外遊び(アクティブな活動支援)
6. ニュースポーツ・軽スポーツ(用具を使用した活動)
7. 被災児童対象のキャンプ(1泊2日・2泊3日程度)
8. その他(料理やお菓子作り、ネイルケア、お茶会等)

被災地のスポーツ環境変化(復興期)

1. 体育館→被災住民の避難所
2. 野球場→自衛隊などの前線基地
3. サッカー場→仮設住宅などの設置
4. ボランティア支援(+α)→スポーツ活動は困難
5. 土日祝日、夏休み→子供たちへの対応
6. スポーツ愛好者→様々な制限を受け困難
7. 高齢者→仮設住宅で孤立(特に復興期以降)
8. 放射性物質汚染地域→野外運動時間制限

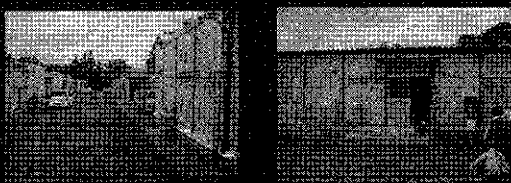
石巻市総合運動公園



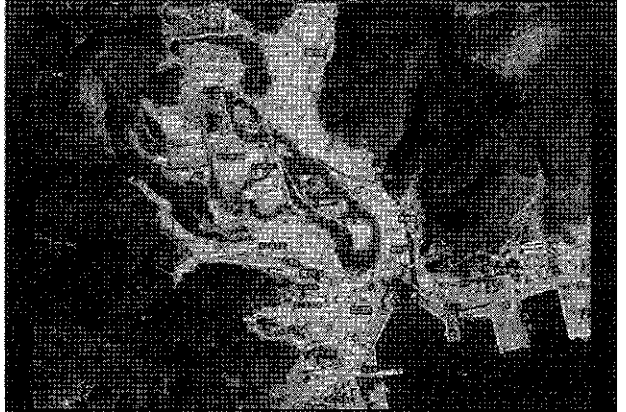
石巻市総合運動公園

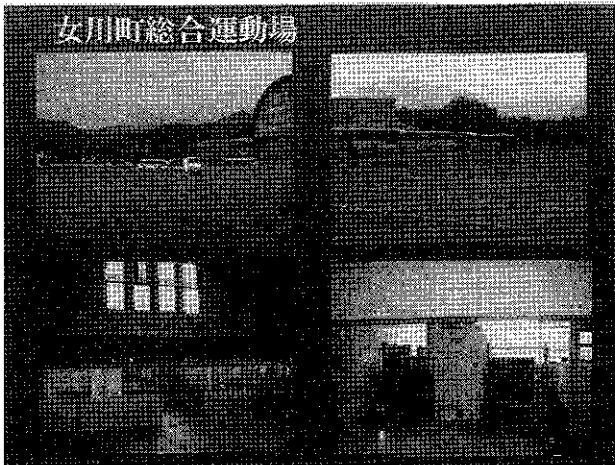


美里町仮設住宅



女川町総合運動公園





震災復興計画

宮城県

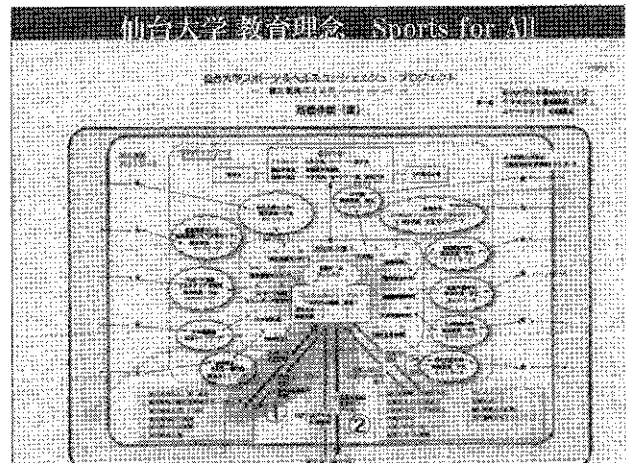
復旧期 3年間 (H23~25年度)
被災者支援を中心に生活基盤や公共施設を復旧

再生期 4年間 (H26~29年度)
復旧の被災者だけでなく、震災の影響により生活・事業等に支障を来している方々への支援を更に充実していくとともに、本県の再生に向けたインフラ整備などを充実

発展期 3年間 (H30~32年度)
県勢の発展に向けて積極的に取組を推進

復旧期 → 再生期

スポーツ⇄各市町村の復興計画における位置づけによる



石巻専修大学の組織的取り組みの全体像

復興共生プロジェクトのイメージ

石巻市 石巻専修大学 復興共生プロジェクト

被災地の最前線で活動する石巻専修大学が地域復興のセンターとなり、地域とともに復興を目指す

石巻専修大学ホームページより

東北福祉大学の組織的取り組みの全体像

「災害対策本部」を設置。災地の現状を踏まえた支援を行う
東日本大震災・大津波の発生直後に設置された東北福祉大学「災害対策本部」、ボランティア活動の本部も兼ねており、被災地の現状、ニーズを踏まえた支援に当たっています。

医療や避難所での生活支援など各種ボランティアに7月1日現在、延べ60件、学生、教職員合わせて延べ約2,500人が参加しています。

今後も地域の実状、ニーズに沿ったボランティア支援を実行していきます。

「東北福祉大学災害支援ボランティア安全管理ガイドライン」[ver.1] 各災害支援地に向かう際、本学ボランティア活動者の安全管理ガイドラインをご紹介します。ご意見・ご感想は下記までお寄せください。

東北福祉大学ホームページより



日本体育学会第62回大会
体育社会学分科会シンポジウム

スポーツの社会的役割と可能性の再考: スポーツによる復興支援の中で

地域スポーツの観点から

報告者: 黒須 充(福島大学)

日 時: 2011年9月26日(月)
9:30-12:00
場 所: 鹿屋体育大学205教室

研究の目的

本研究では、総合型地域スポーツクラブが行ってきた被災地支援活動(原発事故の避難者支援活動含む)の取り組みや事例を紹介し、スポーツによる復興支援の可能性と今後の課題について明らかにすることを目的とする。

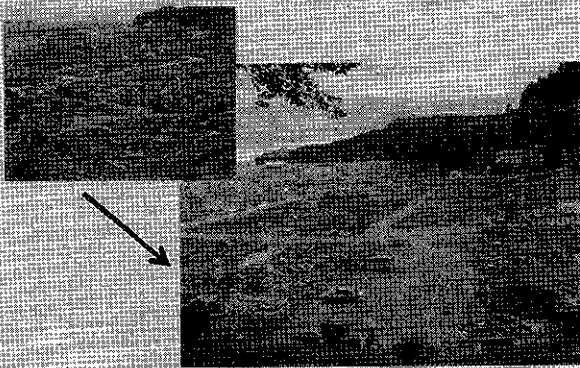
研究の方法

- ① 岩手県、宮城県、福島県の震災後の総合型地域スポーツクラブの現状について調査を行う。
- ② 被災者・被災地の支援活動を積極的に行っている総合型地域スポーツクラブを訪ね、インタビュー調査及び資料収集を行う。

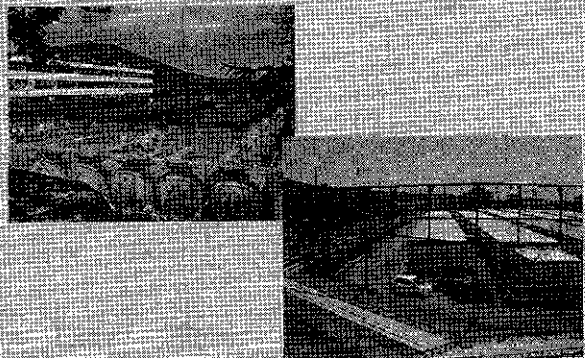
東日本大震災直後の陸前高田市



3ヶ月後



仮設住宅の建設



名勝「高田松原」



2キロにわたって約7万本の松が植えられていた。夏は海水浴客など多くの観光客が訪れていた。

Now..



震災後の総合型クラブ

- 東日本大震災発生に伴い、沿岸部は津波により自宅を流され、原発から半径20km・30km圏内の人たちはふるさとを追われ、避難所生活を余儀なくされている。
- 徐々に仮設住宅へ生活の場を移しているものの、通常の生活に戻るまでには相当な時間を要すると思われる。
- 学校や公共施設の多くは、被災者の避難場所、運休会場、物資倉庫、自衛隊や海外救助隊などの各種支援活動の拠点として利用されてきたことや、仮設住宅の多くが、運動公園（グラウンド・野球場など）や学校の校庭などに建設されているため、クラブの活動場所がない。
- 沿岸部にある総合型クラブの多くは、クラブ関係者（会員含む）の多くが被災に遭っていることや活動拠点を失ってしまったため、活動再開の目途が立っていない。一部再開しているクラブもあるが、今年度の余剰収入が見込めず、経営を切り詰めるなどの自助努力を行っているものの、先行き不透明な状況にある。

1. NPO法人フォルダ

岩手県北上市にあるNPO法人フォルダでは、クラブ内にボランティア組織「いわてゆいっこ」を立ち上げ、震災の6日後から毎日のように大船渡市や陸前高田市（車で往復4時間）を訪れ、ツイッター等による呼びかけで集まった支援物資を避難所に届ける活動や、各避難所を回って、被災者の現状や要望を聞き出す活動をしている（表1参照）。

また、映画上映、読み聞かせ、子供や高齢者の運動指導、メール手紙届け、豚汁・おにぎり炊き出し、花見温泉ツアー、歯科衛生指導、フランチ、美容室送迎、避難所コンサート、郷土芸能、菓子作り、沖縄エイサー巡回公演など、行政ではできないきめ細やかな支援活動を展開している。

DVD紹介(4分)

2. 半九レインボースポーツクラブ

宮城県宮崎市にある半九レインボースポーツクラブの澤山氏等は、地震発生2日後に、被災地に支援物資を届けるため、宮崎市から片道約1,700km、23時間かけて仙台にやってきた。それ以来、これまでに6回東北を訪れている（表2参照）。総合型クラブのネットワークを活かしながら、アクアゆめクラブ（宮城県七ヶ浜町）、塩釜FC（宮城県塩釜市）、福島市や郡山市に避難している南相馬市や富岡町のクラブ関係者を訪問し、物資の支援、炊き出し、ガレキの撤去やヘド口除去、フリーマーケット、スポーツ交流など幅広い支援活動を展開している。



（半九クラブ支援物資を届ける）

（半九レインボースポーツクラブ）

（宮崎県南相馬市で避難者の支援活動）

3. NPO法人とらい夢

新潟県新発田市にあるNPO法人新発田市総合型地域スポーツクラブ「とらい夢」では、クラブの事務局がある「サンビレッジしばた」と活動場所の一つである「カルチャーセンター」が震災直後から避難所となったため、クラブスタッフは避難所内を巡回し、個別的にストレッチの指導を行った。その後、新発田市からは定期的に開催してほしいという提案を受け、被災者を対象とした「エコノミークラス症候群予防運動教室」を実施した。3月28日から4月15日の3週間で、延べ253名が参加した。



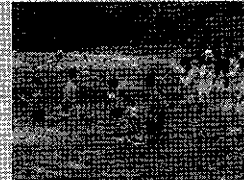
(ストレッチ指導)



(30名以上クラスを組む予防運動教室)

4. NPO法人くちくまのクラブ

和歌山県上富田町にあるNPO法人くちくまのクラブ「SEACA」では、福島の子どもたち30名を招待し、7月30日～8月7日までの日程で白良海水浴場、熊野古道、湯釜温泉、アドベンチャーワールドなど紀南の自然を高興してもらおうと交流プログラムを実施した。放射能の影響から屋外での活動を制限されている福島の子どもたちが、貼つかみや飛び込みなど、文字通り、水を得た魚のように元気に活動していた。



(貼つかみや飛び込みなど)

5. NPO法人石巻スポーツ振興サポートセンター

宮城県石巻市にあるNPO法人石巻スポーツ振興サポートセンターの松村理事長は、震災による津波で自宅が流され、避難所生活を余儀なくされたにもかかわらず、総合型地域スポーツクラブの活動を通して培った幅広い人脈を活かして、積極的に被災者・被災地支援活動を行っている。被災した子どもを対象としたドッジボールやキックベースボールなどスポーツを楽しむイベントを多数企画・実施している。また、津波で全壊した住宅街などを歩き、被害の現状と復興の歩みを目に焼き付けようと「復興ウォーキング」を呼びかけ、県外からも多くの人が参加している。



(キックベースボール)



(復興ウォーキング)

6. NPO法人クラブパレット

石川県がほく市にあるNPO法人クラブパレットは、6月17日(金)夜に石川県を出発し、18日(土)早朝に同じ総合型クラブが活動する南相馬市に到着した。クラブのマイクロバスとワゴン車に総勢23名が乗車し、18日(土)、19日(日)の2日間にかけて側溝の泥出しやガレキの撤去作業を行い、塩害対策として3枚の田んぼにヒマワリの種をまいた。参加者のつながりは今も継続しており、めいめいが何らかの形で支援の活動を継続している。これを続けていくことが大切で、その中から生まれるつながりやマインドが被災地・被災者だけでなく、日本全体の今後のクラブが大切にするべきものを教えてくれたのではないかと考えている。(NPO法人クラブパレットHPより)



(側溝の泥出し作業)



(ヒマワリの種をまく)

7. NPO法人浦和スポーツクラブ

埼玉県さいたま市にあるNPO法人浦和スポーツクラブは、毎月の会費の引込に、1世帯あたり100円を上乗せすることとし、1,000世帯を超える会員が賛同して参加している。また、埼玉県の総合型クラブ連絡協議会では、被災地から埼玉県に避難してきた人たちがクラブの活動に参加する場合、今年度中について会費を無料に受け入れることを決定した。その他、県内のクラブと協力して、県立駒西高校跡地に避難している福島県双葉町の皆さんのところに伺い、歌声広場や健康体操などのプログラムを提供している(主に、北本あさひスポーツクラブ、さいたまスポーツクラブなどのクラブが活躍されている)。



8. はなわふれあいスポーツクラブ

福島県筑前町にあるはなわふれあいスポーツクラブは、8月14日に毎年実施してきた「どろん祭り(どろんこバレー、どろんぶらぐ、どろん綱引き、どろん宝拾い、トマトきゅうり早食い王決定戦等)を、今回はチャリティイベントとして実施した。

天候にも恵まれ、帰省していた町民はもろろんのこと、近隣の市町村や県外からもたくさんの参加者＆観戦者があり、たくさんの義援金が寄せられた。



9. NPO法人はちきたSC

東京都八王子市にあるNPO法人はちきたSCは、大型バスによる被災地支援ボランティアツアー(泊2日/八王子発着)を企画し、復興支援のための活動を行っている。

◇第1回(2011.4.7)

はちきたSCのスタッフ4名が、会員から託された支援物資を持って、「アグアゆめクラブ」のある宮城県七ヶ浜町を訪れ、避難所づくりや水の汲み替えなどを手伝った。

◆第2回(2012.9.9~9.10)11名

HPや会員のネットワークを活用して参加者を募り、再び宮城県七ヶ浜町を訪れ、イベント会場周辺の草むしりや砂浜のゴミ拾いを行った。1日かけてゴミ拾いを行っても、潮が満ちて波が押し寄せると、またゴミが運ばれてくる。何度も何度も繰り返しゴミを拾い続けなくてはならないという現実に、改めてボランティアの必要性を感じた。

※今後も月一回のペースで継続的に現地に向かう予定である。

出発日: 10/14(金)、11/11(金)、12/9(金)、1/7(金)、2/17(金)、3/9(金)

10. ライン・ノイス郡(ドイツ)

「夏休みに福島の子どもたちをドイツに招待したい」と書かれた1通のメールが私の元に届いた。差出人であるアクセル・ベッカー氏が所属するライン・ノイス郡スポーツ連盟と、加盟する地域のスポーツクラブが連携し、渡航費とドイツ滞在に関わるすべての費用をノイス郡側で負担するめどがついたので、私に福島県との橋渡しを依頼したいという内容であった。本プロジェクトは6月2日から9日までの7日9日の日程で実施され、福島県内の総合型地域スポーツクラブで活動している中学生20名が参加した。

震災以来、放射能の影響から屋外での活動が制限されていた子どもたちの表情は、新鮮な空気を胸いっぱい吸い込み、現地のグラウンドで思いっきり走り回ったり、芝生で駆け回ったりするに連れ、だんだんと明るくなっていった。どの子どもも無心に遊ぶこと、思いのままに活動できることの幸せを感じていたのだった。



段階的な支援内容とスポーツニーズ

① 「命」をつなぐ支援

食料・飲料水・生活物資の不足、情報途絶、避難所生活
→ 支援物資、炊き出し、泥出しやガレキの撤去、義援金

② 「人」をつなぐ支援

仮設住宅で孤立化、引きこもり、運動不足
→ 交流・ふれあい・情報交換の場、健康づくり、ストレス発散

③ 「社会」をつなぐ支援

将来への不安と希望
→ 顔の見える関係づくり、新たなコミュニティづくりへの参画

ネットワークの力

① クラブ内ネットワーク

② 地域内ネットワーク

③ クラブ間ネットワーク

今後の課題

- ① 当面、生活の再建、地域経済の立て直し、被災者の心とからだのケアを優先しなければならない。
- ② 8月25日現在の避難者数は82,945人、その内、自県外へ避難等している人は、宮城県から8,400人、岩手県から1,458人、福島県に至っては54,462人にものぼり、避難生活の長期化が予想される。
- ③ 被災地のスポーツ環境は、復興計画の中で総合的に見直していかなければならない。



- ④ 被災地・被災者支援を一過性に終わらせてはいけない。数年、十数年にわたる継続性、持続性のある支援活動が必要である。
- ⑤ 自助、共助、公助が三位一体となって復興に取り組みが必要である。
- ⑥ 政府や地方自治体の支援に過度に依存するのではなく、住民主体の復興が求められる。

地域コミュニティと地域スポーツの再生

- ① 被災地に地域コミュニティの拠点となるコミュニティ・ビューロー(事務所)を開設し、復興に向けて地域住民が協力し合う体制づくりを構築する。
- ② 新しい地域コミュニティづくりと地域スポーツ再生のために、地域社会の協働を促進する総合型クラブの育成・強化は有効なツールである。
- ③ 姉妹クラブの交流を通して、被災地域と被災が地域の助け合い、支え合いを奨励する。

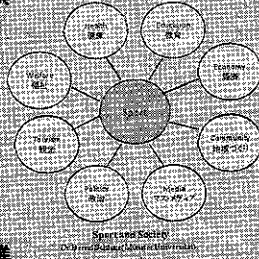
文部科学省「新しい公共宣言」(平成22年6月4日)

◇行政による無償の公共サービスから脱却し、地域住民が出し合う会費や寄付により、自主的に運営するNPO型のコミュニティスポーツクラブが主体となって地域のスポーツ環境を形成する。

◆地域住民が支え合う総合型地域スポーツクラブの活動の充実を通じた「新しい公共」の実現や、地域スポーツ環境の充実。

地域スポーツクラブの社会的役割

- ◎ 住民にスポーツの機会の提供
- ◎ 健康増進と疾病予防
- ◎ 競技力の向上
- ◎ 青少年の社会教育の場
- ◎ 市民の社会参加の促進
- ◎ 社交や親睦の場の提供
- ◎ 女性の積極的関与
- ◎ 社会的諸機関との協働の促進
- ◎ 地域の連携、一体感の醸成



おわりに

現代社会は、個人主義化が進行し、社会の形成において欠くことのできない個人間のつながりや信頼関係、規範意識が希薄化していると言われている。しかし、今回の東日本大震災によって、助け合い、支え合い、自治体同士の相互支援など、人と人、組織と組織の結びつきや絆の大切さが見直されるようになってきた。

今回、総合型クラブの被災地支援活動に着目して研究を進めてきたが、地域スポーツクラブがシステムとして持っている能力の中に、経済優先の社会やモノの文化とは対極的な価値を人々に伝える力があり、これからの復興に極めて重要な役割を果たす可能性があるのではないかと感じた。

陸前高田市の避難所で出会ったある避難者の言葉がとても印象に残っている。

「なくしたものはいっぱいあるけれど、人々のつながりは強くなった」

表1 NPO法人フォルダの被災地支援活動(2011年3月16日～5月31日)

日付	曜日	場所・行き先	被災地 支援人数	支援活動
3月16日	水	北上市の事務所		ツイッター(全国の人々)やNPO法人フォルダ関係の人に物資の提供を呼びかける。
3月17日	木	大船渡市長源寺、三陸町越喜来	3名	知人の安否の確認、現地の情報収集、必要な物資・支援などの聞き込み、支援物資を届ける。
3月19日	土	大船渡市、陸前高田市	5名	ワゴン車と2トトラックで物資を届ける。
3月20日	日	大船渡市円満寺、陸前高田市松峯団地ほか	7名	自宅避難者等に足りない物資を届ける、安否の確認、情報の提供、情報の収集
3月21日	月	大船渡市、陸前高田市	2名	被災地での支援活動と平行し、事務所では足りない物資の募集と届けられた物資の仕分け作業を行う。関東から支援物資が30箱到着。
3月22日	火	大船渡市、陸前高田市	2名	物資を届ける、情報収集(聞き取り)、大東町ボランティアセンターで合同会議
3月23日	水	大船渡市、陸前高田市松峯団地ほか	3名	不足物資を届ける、松峯団地に方に娘さんから預かった手紙を渡す。
3月24日	木	陸前高田市金剛寺、松峯団地ほか	5名	物資の運搬、軽油・ガソリンが底をつき、寄付を募りつつ活動。
3月25日	金	陸前高田市	3名	上村愛子さん等からスキーウェアの入った段ボール300箱届く。早速、被災地に届ける。
3月26日	土	北上市		東陵中グラウンドでヘリが発着できるように20人でサッカーゴールを移動する。
3月27日	日	陸前高田市松峯団地	13名ほか	朝8時から約100名のボランティアでおにぎり豚汁作り。炊き出し車11台で陸前高田市松峯団地に豚汁とおにぎりを届ける。
3月28日	月	陸前高田市	3名	ヘリ3機。全日本スキーヤー竹鼻選手が発電機を持参、他の物資と一緒に被災地に届ける。登山愛好家小松由佳さんがボランティア参加のため北上入り。
3月29日	火	大船渡市、陸前高田市末崎避難本部ほか	5名	ヘリプターで岐阜から物資が到着。末崎避難本部等に物資を届ける。
3月30日	水	大船渡市松崎地区、陸前高田市広田の避難所	7名	大船渡市の松崎地区に重点的に物資を届ける。陸前高田市広田には、花巻支部からの依頼物資を届ける。翌日の物資運搬のため、住田町役場に泊まる。
3月31日	木	大船渡市	7名	大船渡市松下政経塾で物資を受け取る。2トトラック3台分の物資を運搬する。
4月1日	金	北上市の事務所		翌日の物資運搬用トラックの募集をかける。ラジオ番組に出演し、被災地の最新状況を話す。
4月2日	土	北上市の事務所		翌日の炊き出しのためのおにぎりボランティア募集をかける。3日分の買い出し。
4月3日	日	釜石市、大船渡市、陸前高田市	18名	茨城のボランティア団体が炊き出しを行い、被災地におにぎり等を届ける。
4月4日	月	大船渡病院、陸前高田市松峯団地ほか	8名	物資を届ける。松峯地区区長のお見舞い、情報収集、支援の希望の聞き取りと調整
4月5日	火	大船渡市末崎中学校、陸前高田市金剛寺ほか	11名ほか	復興ミニコンサート(末崎中、松峯団地、金剛寺)を行う。
4月7日	水	大船渡市長源寺、陸前高田市金剛寺ほか	14名	長源寺コンサート、正徳寺、末崎中、金剛寺に物資を運搬する。
4月8日	金	北上市の事務所		大きな余震があり、翌日から北上市青少年ホームが避難所となるため、対応準備。
4月11日	月	陸前高田市米崎小避難所、金剛寺ほか	4名	アニメ映画上映会(うちのタマ知りませんか、忍たま乱太郎ほか)、金剛寺に物資を届ける。
4月12日	火	陸前高田市米崎小避難所、松峯団地、金剛寺	2名	紙芝居、読み聞かせ会、物資を届ける。花見(4/17)や支援イベントの打ち合わせを行う。
4月14日	木	北上市		花見(4/17)の買い出しを行う。
4月15日	金	陸前高田市金剛寺	10名	金剛寺で4月17日に行われる花見の準備、花巻倉庫に運搬(15名)
4月16日	土	北上市		北上市青少年ホームにて、じゃーんず、バンピークラー王子のミニライブ。
4月17日	日	陸前高田市金剛寺	25名	第1回陸前高田さくら祭、八木巻神楽、鬼剣舞等が披露される。マスコミ総勢100名あまり来た。
4月19日	火	釜石市釜石高校避難所	1名ほか	釜石高校避難所でじゃーんずのミニライブを企画、同校合唱部とのコラボも実現。
4月23日	土	花巻市	10名	花巻支部倉庫で支援物資の仕分けを行う。
4月24日	日	大船渡市海楽荘、陸前高田市第一中学校ほか	7名	末崎中学校で炊き出し(おにぎり570個、豚汁、手作りのお菓子等)を行い、大船渡市海楽荘や陸前高田市第一中学校や金剛寺の避難所に届ける。
4月25日	月	北上市		北上市の観光協会と連携し、被災した方をお花見&温泉に招待するプランの募集を開始する。
4月29日	金	北上市瀬美温泉		陸前高田市松峯団地の方を北上市にある瀬美温泉に招待する。
5月1日	日	北上市		北上市さくらの西館1階で「北上なう」イベントを開催、三陸の海産物の販売、まるすず(陸前高田市魚屋)出店、温泉足湯、フラダンスショー、佐々木由香利ライブ、豚汁サービスなど。
5月2日	月	北上市の事務所		テレビ朝日報道ステーション取材対応。
5月3日	火	北上市		北上市さくらホールでチャリティライブを行う。プレゼント: CD350枚、DVD10枚、CDデッキ3台。
5月5日	木	北上市		北上市詩歌の森公園でチャリティランニング・ウォーキングを実施、参加者30名。
5月6日	金	大船渡市、陸前高田市	9名	大船渡市役所に布団の搬入、松峯団地や米崎小学校避難所にCDとCDデッキを搬入、高田保育所に預かった物を渡す。
5月16日	日	陸前高田市松峯団地、金剛寺	18名	松峯団地でフラダンスショー(参加者約160名)、歯科衛生(7名)、金剛寺に女性用長靴を届ける。
5月18日	水	北上市和賀町		物資の運搬、ニーズ調査
5月21日	土	北上市水神温泉	2名	大船渡市からの避難者に物資を届ける。
5月22日	日	北上市和賀町		避難者9名を花巻の倉庫へ送迎し、物資調達。
5月23日	月	盛岡市	2名	ハートナイトプロジェクトの打ち合わせ
5月26日	月	北上市和賀町水神温泉		水神温泉で避難生活を送っている被災者の方を北上市中心部へ送迎(買い物、美容院、銀行等)
5月31日	火	宮古市		宮古市田老字八幡 県立宮古北高校でジャージの受け取り

表2 半九レインボースポーツクラブ澤山氏の被災地支援活動(2011.3.13-7.30)

No	日付	行先	施設名	相手方	対象人員	支援内容	詳細	メンバー	協力	備考	
I	1	3/13	宮崎→宮城			移動	陸路	澤山	企業、他	自家用車 給油困難 余震多発	
	2	3/14	宮城県仙台市	企業社宅	リーダー	20	救援物資				飲料水(スポーツドリンク)宮崎より
	3		宮城県大衡村	企業工場	リーダー	1000	救援物資				飲料水(スポーツドリンク)宮崎より
	4		宮城県仙台市	社会福祉協議会	担当者		救援物資				飲料水等
	5	3/15	宮城県仙台市	災害支援センター	担当者		救援物資				飲料水等
	6		宮城県仙台市	宮城野区避難所 高砂中学校	リーダー	1000	救援物資				食料、飲料水、果物、野菜ジュース等 (山形まで戻って購入)
	7	3/16	宮城→大阪				移動				陸路
II	8	3/20	宮崎出発	クラブ事務所			救援物資	半九レインボークラブ事務所最終積込み ダンボール約500個 出発→陸路	澤山	企業数社 うづらクラブ 佐土原クラブ 住吉クラブ その他	トラック 給油困難 余震多発
	9	3/21	宮城県仙台市	民間ボランティア	リーダー	10	救援物資	日向夏みかん、宮崎野菜ジュース等			
	10		宮城県大衡村	企業工場	リーダー	1000	救援物資	日向夏みかん、宮崎野菜ジュース等			
	11		宮城県富谷町	企業工場	リーダー	50	救援物資	日向夏みかん、宮崎野菜ジュース等			
	12		宮城県	サッカー協会	会長	10	救援物資	日向夏みかん、宮崎野菜ジュース等			
	13		宮城県塩釜市	避難所/塩釜FC	理事長	10	救援物資	日向夏みかん、宮崎野菜ジュース等			
	14	3/22	宮城県七ヶ浜町	総合型地域SC アリアゆめクラブ	クラブマネジャー	10	救援物資	日向夏みかん、宮崎野菜ジュース等			
	15		宮城県七ヶ浜町	避難所(町営スポーツ施設)	リーダー	1500	救援物資	ダンボール約500個を届けた 食料、米、飲料水、果物、野菜ジュース、毛布/衣類(新品含む)、オムツ、文房具、他			
	16	3/23	宮城→大阪				移動	陸路			
	17	3/24	大阪→宮崎				移動	陸路			
III	18	4/8	宮崎	クラブ事務所			作戦会議	半九レインボークラブ事務所最終打合せ	ありがとう! 宮崎チームI (8名)	企業数社 うづらクラブ 佐土原クラブ 住吉クラブ その他	マイクロバス フェリー 高速道路
	19	4/9	宮崎→大阪				積込→移動	クラブ事務所最終積込み→出発			
	20		大阪→宮城				移動	北陸道			
	21	4/10	岐阜県瑞穂市	総合型地域SC なかよしクラブすなみ	理事長		支援物資	支援物資として、米60Kg・スコップ10本(新品)を 頂いた 日向夏を届けた			
	22		新潟県新発田市	総合型地域SC とらい夢・サトレッジ	クラブマネジャー	200	支援物資	宮崎野菜等を届けた おもちゃ等を頂いた			
	23		宮城県塩釜市	避難所/塩釜FC	理事長	10	支援物資	宮崎野菜、日向夏みかん、ジュース等			
	24		宮城県七ヶ浜町	総合型地域SC アリアゆめクラブ	クラブマネジャー	10	支援物資	宮崎野菜、日向夏みかん、ジュース等			
	25		宮城県利府町	宮城県サッカー協会	サッカー協会 事務局	10	支援物資 物資仕分	ダンボール約200個を届けて仕分けを行った その他にも、宮崎野菜、日向夏、野菜ジュース、 お菓子等			
	26	4/11	福島県福島市	避難所 総合体育館 南相馬市等から	クラブマネジャー	1500	支援物資	宮崎野菜、日向夏みかん、ジュース等			
	27		福島県郡山市	避難所 アリーナ 富岡町から	リーダー	2000	支援物資	宮崎野菜、日向夏みかん、ジュース等			
	28		宮城県七ヶ浜町	総合型地域SC アリアゆめクラブ	クラブマネジャー		清掃	プール、トイレの清掃			
	29	4/12	宮城県七ヶ浜町	総合型地域SC 中央公民館	リーダー	350	炊き出し	宮崎元氣汁、宮崎野菜サラダ、日向夏デザート 等			
	30		宮城県七ヶ浜町	総合型地域SC アリアゆめクラブ	クラブマネジャー	10	瓦礫処理	与ヶ浜のガレキを撤去した 応援メッセージ作り			
	31	4/13	宮城県七ヶ浜町	総合型地域SC 国際村	リーダー	230	炊き出し	宮崎元氣汁、宮崎野菜サラダ、日向夏デザート 等			
	32		宮城県七ヶ浜町	総合型地域SC アリアゆめクラブ	クラブマネジャー		支援物資	鯉のぼり			
	33	4/14	宮城県石巻市	石巻中学校	リーダー		支援物資	鯉のぼり、飲料水、お菓子等			
	34		宮城県石巻市	山下小学校	リーダー		支援物資	鯉のぼり、日向夏、卵、お菓子等			
35		宮城県塩釜市	塩釜FC	理事長		支援物資	鯉のぼり、等				
36	4/15	仙台→大阪				移動	マイクロバス				
37	4/16	大阪→宮崎				移動	フェリー				

No	日付	行先	施設名	相手方	対象人員	支援内容	詳細	メンバー	協力	備考
38	4/30	宮崎→福島				移動				
39	5/1	福島県福島市	避難所 花月グラントホテル 南相馬市から	クラブアドバイザー クラブマネジャー	160	支援物資	宮崎野菜を食材として活用してもらう きゅうり、キャベツ、レモン、つげもの、お菓子、ブロッコリー、日向夏、漬物、トマト、はっさく、お菓子等			
40		宮城県塩釜市	塩釜FC クラブハウス	サッカー協会 会長 兼塩釜FC理事 専務	10	支援物資	宮崎野菜を食材として活用してもらう きゅうり、キャベツ、レモン、つげもの、お菓子、ブロッコリー、日向夏、漬物、トマト、はっさく、お菓子、EM菌等			
41	5/2	宮城県利府町	宮城県サッカー協会	サッカー協会 事務局	10	支援物資 物資仕分	サッカーウェア、EM菌、 宮崎のお土産(日向夏)日向夏、野菜ジュース、 EM菌、ウェア、お菓子、等			
42		宮城県七ヶ浜町	避難所 七ヶ浜町運動公園	ボランティアセン ター	150	清掃	避難所のトイレ清掃 EM菌			
43		宮城県七ヶ浜町	総合型スポーツクラブ アクアゆめクラブ	クラブマネジャー	30	支援物資	宮崎野菜、きゅうり、キャベツ、日向夏、お菓子、 等			
44		宮城県七ヶ浜町	仮設住宅 七ヶ浜町運動公園	クラブマネジャー	150	鯉のぼり	入居前の仮設住宅に鯉のぼりを設置した	ありがとう！ 宮崎チームII (8名)	うづらクラブ 佐土原クラブ 住吉クラブ ぐんけい チームI その他	マイクロバス フェリー 高速道路
45	5/3	宮城県塩釜市	塩釜FC グラウンド	塩釜FC理事 専務	200	地鶏ハーベ キュー、支援物 資、サッカー ボール、レクレ ーション	地鶏炭火焼、日向夏、 野菜ジュース、お菓子、 サッカーボール、レクレ ーション、野菜ジュース、ヨー グルツ、お菓子			
46		宮城県石巻市	避難所 石巻高校	石巻SSC理 事専務	160	炊き出し	炊き出し サラダ、日向夏、他 レクレーション、オヤツ、鯉のぼり			
47	5/4	宮城県石巻市	西光寺	クラブマネジャー 住職	30	ガレキ撤去 ヘドロ除去 物資お届け	スコップ、ピーマン、キャベツ、ネーブル、鯉のぼ り、お菓子			
48		宮城県登米市	避難所 登米スポーツ施設	リーダー	200	炊き出し	炊き出し サラダ、日向夏、他 レクレーション、オヤツ、鯉のぼり			
49	5/5	宮城県登米市	避難所 津山若者体育館	市民生活課	200	炊き出し サッカー フライングディスク	炊き出し 地鶏、サラダ、日向夏、他 サッカー、フライングディスク、 おやつ、鯉のぼり、等			
50	5/6	宮城→宮崎				移動				
51	6/17	宮崎→宮城				移動				
52	6/18	宮城県奥松島、女 川、雄勝、他	港、海岸	-	-	視察	復旧状況確認			
53	6/19	宮城県石巻市	駅前商店街	石巻SSC 理事専務	300	フリーマーケット	フリーマーケット 宮崎特産品を販売 売上13,951円を寄付	レインボー 伴走協会 (8名)	チームII その他	航空機 新幹線 レンタカー
54	6/20	宮城県石巻市	駅前商店街裏路地	石巻ボランティ アセンター	10	駐車場ヘドロ 除去	砂利駐車場に溜まったヘドロを砂利と一緒に約 20人でスコップ等で除去(終日作業)			
55	6/21	宮城→宮崎				移動				
56	7.23-25	宮崎→岩手八幡平			3	移動	東北復興記念サマーサッカー2011(U12)			
57	7.26		安比高原サッカー場		350		ネットワー(被災地支援活動会議)			
58	7.26		ホテル安比グランド本		50		福島復興状況確認打合せ			
59	7.27	岩手八幡平→福島	福島		3		参加者の一人は飛行機で宮崎へ			
60	7.27-30	福島→宮崎	羽田空港経由		2	移動				
計					10543					

スポーツの社会的役割と可能性の再考 スポーツによる復興支援の中で

～アスリートによる社会貢献の視点から～

一般社団法人日本アスリート会議
JAPAN ATHLETE FORUM

代表理事 間野 義之 (早稲田大学)

2011年4月 一般社団法人日本アスリート会議 設立



日本アスリート会議の参加メンバー

【議員】

井村 義代
(一般社団法人井村シシクロクラブ理事長、元シシクロナイズドスイミング日本代表ヘッドコーチ)

宇津木 妙子
(NPO法人ソフトボールドリーム、元全日本女子ソフトボールチーム監督)

岡田 武史
(一般社団法人OLJ理事長、元サッカー日本代表チーム監督)

倉石 平
(NPO法人MIPスポーツプロジェクト理事長、元男子バスケットボール日本代表チーム監督)

平塚 誠二
(NPO法人SCIX理事長、元ラグビー日本代表チーム監督)

榎本 晶一
(アスリートネットワーク理事長、元全日本女子バレーボールチーム監督)

【顧問】

王 貞治
(財団法人世界少年野球連盟副理事長、元ワールドベースボールクラシック日本代表監督)

アスリートができること

アスリートは、人々に夢と希望を与えることができる希有な存在であり、特に子どもたちにとっては大きな憧れ。

すでに多くのアスリートが特定非営利活動法人等の組織を立ち上げ、そのための活動を始めている。(アスリート・ネットワーク、MIPスポーツプロジェクト、SCIXなど)

これらの組織が手を取り合い、アスリートたちが競技種目の枠を超えて集い、想いや目標を共有することで、さらに大きな夢と希望を人々に伝えることができるはず。



日本アスリート会議とは

日本アスリート会議は、アスリート一人ひとりが、自分ができる方法でNPO等に参画し、自らが社会や地域また世界に想いを伝えながら、人々に夢と勇気を与え続けることを手助けするための中間支援団体。

日本のスポーツが始まり百年が経ち、これまでアスリートは社会のなかで支えられてきたが、これからの百年は現場目線に立ちアスリートが日本を支えていくことを支援。



日本アスリート会議の目指す主な活動

【1】アスリートの社会貢献活動支援
全国各地で活動を行っているアスリートによる社会貢献活動(アスリートNPOs)が、面をつなぐことによりプログラム・人材・情報などの情報が共有できより大きく効果的な活動が行える。アスリートNPOsの社会貢献活動への取り組みについての方向性を議論し、そのための中間支援団体としての役割を果たす。

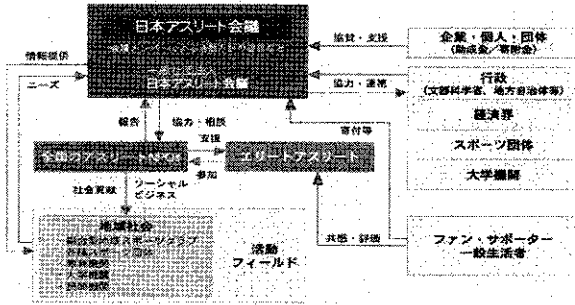
【2】アスリートNPOsとの連携促進
アスリートNPOsの相互の連携を促すため、情報交換の促進ならびに横断的なプラットフォームの場を創出。そのために定期的に各NPOs事務局レベルの情報交換会を開催。

【3】アスリートが活動する場の提供
スポーツ基本法の施行やスポーツ立国戦略の策定などスポーツが国策として取り扱われ、スポーツの価値は高まり注目されている。その中でアスリートが子どもたちに本物の感動を伝え、夢を育むことは大切。このようなアスリートの価値を高めるための活動の場や教育の場を提供。

【4】スポーツにおける社会貢献活動やアスリートの環境改善に関する調査・研究調査
アスリートが行う社会貢献活動に関する総合型地域スポーツクラブなどのニーズを定期的に調査。また、災害時の復興支援などアスリートが貢献できる活動についても調査。さらに、諸外国のアスリート組織を参考に我が国独自のアスリート活動の環境形成を支援。

【5】上記活動の環境形成支援
日本代表監督経験者であり自ら社会貢献活動を組織化して行っているメンバーによる「日本アスリート会議」を開催し、これからの百年を見据え、現場目線でスポーツにおけるアスリートの在り方や社会貢献活動期についてなどを議論し提言する。

日本アスリート会議の活動基本スキーム



アスリート組織の海外事例①

● Athletes CAN

1992年設立の、カナダのナショナルチームアスリートの協会。全てのナショナルチームを代表するマルチスポーツサービス組織。スポーツ政策に影響を与え、強固なスポーツ文化をつくれるアスリートリーダーを養成し、アスリートに集約的なスポーツシステムを保障することを目的とし、アマチュアアスリートへの奨学金制度や、アスリートの家族への保健・歯科衛生サービス、選手の表彰などの事業を行っている。

● British Athletes Commission

2004年にイギリスにて設立された組織。オリンピック、パラリンピック、および世界クラスの資金援助を受けるアスリートの統合声明の役目を務める。アスリートが現役活動中、及び引退後において最高のサービスを受けられることを目的としており、アスリートに対する法的サービス及び助言者サービス、アスリートの学校訪問などの事業を行っている。

アスリート組織の海外事例②

● Australian Athletes' Alliance

2007年にオーストラリアにて設立された、オーストラリア国内の7つのプロスポーツ選手協会が構成される組織。会員の共同利益や活動の促進・保護、会員間の知識・情報を共有する機会の提供、会員や他のスポーツ選手のさらなる利益や持続可能性のための商業準備を目的としている。

● European Elite Athletes Association

2008年設立で、欧州15カ国のプロスポーツ選手協会連邦。本部はオランダにあり、合計24の協会が参加している。

- 例: Spanish Basketball Players Association
- Italian Volleyball Players Association
- Danish Elite Athletes Association
- Finnish Hockey Players Association

アスリートの育成、人権問題やドーピング問題への取り組み、各協会に関わる問題の解決などを行っている。

「ウォームアップ・ジャパン・プロジェクト」



アスリートが、練習や試合に臨む前に必ず行う「ウォームアップ」は、アスリートが自らの心と身体を完璧に立ち向かうために、充実した状態にまでアップさせる必要不可欠な準備運動。

東日本大震災が発生したことで、日本には今、困難な状況に立ち向かう準備「ウォームアップ」が必要な人たちがたくさんいる。

日本アスリート会議では、「ウォームアップ・ジャパン・プロジェクト」と銘打ち、全国のアスリートたちと手を携え、困難に向かおうとしている日本の人たちの心と身体をウォームアップするための活動を、様々な形をとりながら展開。

「ウォームアップ・ジャパン in 福島 リフレッシュキャンプ」

期 間: 2011年7月～2011年8月(全18回)
場 所: 国立磐梯青少年交流の家、国立那甲子青少年自然の家
参加者: 福島県内の小・中学生が、毎回50～200名程度参加

概要
放射線量の高い地域に住む福島県の子ども達を対象に、アスリートによるスポーツプログラムを実施。これまでバドミントン、テコンドー、バレーボール、サッカー、ラグビー、陸上競技というように多岐にわたる種目のプログラムを実施。

- 主な参加アスリート
- 朝原直治(北京五輪陸上男子400mリレー銅メダリスト、アスリートネットワーク)
 - 岡本依子(シドニー五輪テコンドー銅メダリスト、アスリート・ネットワーク)
 - 小椋久美子(元バドミントン日本代表、MIPスポーツプロジェクト)
 - 川上直子(元サッカー女子日本代表、MIPスポーツプロジェクト)
 - 為末 大(110mハードル日本代表、アスリート・ソサエティ)
 - 長塚智広選手(自転車競技日本代表、アスリート・ソサエティ)
 - 金村義明(元プロ野球選手、NOMOベースボールクラブ)



② 岩手参加者調査

●「ウォームアップ・ジャパン・プロジェクト from Tokyo: いわて大運動会-いわてスポーツクリニック-」に関する調査について

調査概要

プログラムを通じての参加者の運動への意識の変化、プログラムに対する満足度について、参加前と参加後に分け、5段階尺度のアンケートによる質問紙調査を実施した。

質問例:

- ・今後、運動・スポーツをやりたい。(5段階尺度)
- ・運動のあとは、ここちよい気持ちになる。(5段階尺度)

調査対象

プログラムに参加した中学生

調査進捗状況

プログラム2日目に、各中学校の引率教員を通じて参加した中学生全員に配布。先生に回収及び郵送をしていただくようお願いした。現在は郵送によるアンケート回収中。

③ 全国アスリート調査

調査目的:

アスリートの社会貢献活動のニーズを知ること。
社会貢献活動の有無や今後の展望、活動に対する意識を知ること。総合型地域スポーツクラブへの訪問や活動の有無を知ること。

調査対象:

プログラム参加のNPO所属アスリート 738人 (21NPO団体)

調査方法:

調査票をNPO法人を経由し、所属するアスリートに郵送。

調査期間:

2011年7月中旬～8月

回収数:

協力が得られた団体数が18、所属アスリート数が304。うち調査票の回収数は82(回収率16.3%)

■これまでにを行った自発的な社会貢献活動

行っている:18.5%

(過去に行っていた:9.8%

行っていない:8.5%

■社会貢献活動の内容

地域でのスポーツ指導:55.1%

被災地への金銭・物的支援:17.3%

講演会:6.1%

■アスリートが行いたい社会貢献活動(複数回答)

地域でのスポーツ指導:72.0%

学校での体育・部活動指導:57.3%

講演会:34.1%

チャリティ活動:31.7%

被災地への金銭・物的支援:24.4%

■今後、被災地で行いたいこと(複数回答)

スポーツ教室:82.3%

チャリティイベント:45.1%

避難所や学校への訪問:29.3%

がれきや汚染の撤去:17.1%

炊き出し:15.9%

講演会:14.8%

④ 総合型地域スポーツクラブ調査

調査目的:

総合型クラブのアスリートに対するニーズを知ること。政府や地方自治体に対する要望を聞くこと。東日本大震災に関しての要望を聞くこと。

調査対象:

被災した岩手・宮城・福島県の総合型クラブ 142ヶ所

調査方法:

調査票を対象各クラブに郵送

調査期間:

7月中旬～8月

回収数:

調査票の回収数は80(回収率42.3%)

■アスリートの派遣について

希望する:52.3%

希望しない:44.3%

■派遣したアスリートに期待すること

スポーツ教室・特別授業:49.2%

アスリートによる講演会:32.6%

用具など物資の提供:8.2%

■アスリートの派遣を希望しない理由

受け入れ費用を負担できない:59.3%

業容を維持できない:48.1%

■クラブの所在地域や避難所で支援活動の有無

アスリート活動があった:32.3%

アスリート活動がなかった:63.9%

■アスリートの支援活動の内容

避難所・学校への訪問:60.0%

救援物資の配達:25.0%

炊き出し、講演会:15.0%

日本アスリート会議の今後の課題

・アスリートNPOsの連携強化

・諸外国のアスリートNPOとの連携促進

・情報発信力の強化

・事務局組織の確立

・基盤となる財源の確保

ご清聴ありがとうございました。

【お問い合わせ】

一般社団法人日本アスリート会議

TEL: 03-3466-0072

FAX: 03-3466-9377

URL: <http://www.iathlete.jp/>

MAIL: iathlete_forum@yahoo.co.jp

あとがき

コーディネーター：長ヶ原 誠 ・ 北村 尚浩

2011年3月11日に未曾有の被害をもたらした東日本大震災を契機に、我が国は文字通り一変し、わが国のスポーツにも大きな試練と転機をもたらした。広範囲に及ぶ被災地での人的、組織的、物理的な損失は、日常の地域スポーツ活動やそれを支える社会的基盤を一瞬にして奪い去り、国内の他の地域や自治体においても、多くのスポーツ大会やプログラムが中止や延期を余儀なくされ、スポーツに関わる興行的活動の自粛や、スポーツ行政の停滞、スポーツ産業の縮小への不安等、その影響の大きさは計り知れなかった。そのような逆境の中でも、スポーツを通じた復興支援の機運の高まりも見られた。被災地におけるスポーツ関係団体・個人による被災者救援や復旧支援、地域スポーツ資源を活用した避難・ケア支援、チャリティイベントの開催やアスリートによる義援金寄付や募金活動に見られる財政支援、被災者に対して直接的にスポーツ活動の機会や経験を提供するボランティア支援等、スポーツを通じた復興支援による様々な社会・地域貢献や事業が展開されている。本分科会シンポジウムは、スポーツの果たすべき社会的役割とその可能性についてこの時期こそ再考すべきという方向性のもと、本分科会の重要テーマである「スポーツによって何ができたのか」、「スポーツによって今後何ができるのか」というテーマを議論し、今後のわが国のスポーツ振興に向けての新たな視座や将来ビジョンを共有することを目的として開催した。被災地からの現場報告や復興支援に携わる分科会会員からの情報提供として、パネリストを仲野隆氏(仙台大学)、黒須充氏(福島大学)、間野義之氏(早稲田大学)、指定討論者には、山本浩氏(法政大学)ならびに成田真由美氏(日本テレビ放送網株式会社)にご登壇頂いた。仲野氏からは、教育機関・ボランティア組織の視点から、ご自身の被災経験と共に、勤務先である仙台大学の教員・学生や地域ボランティア団体による救援・復旧活動を詳細にご報告頂き、被害の甚大さと共に、地元教育機関やボランティア団体の組織力と行動力に触れながら、被災地のニーズ把握やその情報に対応してだけでなく、教育団体や組織の方から実行できる活動の情報を積極的に発信する重要性を今後の課題として述べられた。二人目の演者である黒須氏も同じく、自らの被災体験と状況を克明にご紹介頂き、地域スポーツの視点から総合型地域スポーツクラブの役割について、「命をつなぐ支援」、「スポーツや健康プログラムを通じた支援」、「人と社会をつなぐ支援」の3つの可能性を述べられ、クラブ関係者へのインタビュー調査結果も踏まえながら、地域スポーツクラブがシステムとして持っている能力の中に経済優先の社会やモノの文化とは対極的な価値を人々に伝える力があり、復興にきわめて重要な役割を果たしたこと、このような状況だからこそ地域スポーツが地域の絆を取り戻し、日本社会全体が元気づけられる起爆剤となることを強調された点が非常に印象的であった。最後の演者である間野氏は、アスリートによる社会貢献という視点から、震災直後に設立したトップアスリートや指導者 NPO の集結組織である一般社団法人「日本アスリート会議」を中心に、その設立経緯とすでに展開している「ウォームアップジャパン」復興プロジェクトの内容と成果をお話し頂いた。アスリート組織が連携し競技種目の枠を超えた組織として、エネルギーと目標を共有しながら被災地に実質的なエールと大きな夢や希望を与える可能性と共に、研究者自らがアクションを起こし、スポーツの持つ社会的役割と価値を提供できる可能性を示す非常に印象的な講演を頂いた。

この後、山本氏から、地域住民やスポーツ関係者への調査のあり方、震災前と震災後における地域スポーツクラブの役割の変化、アスリート支援と地域の自立の関係、成田氏からは、主に被災地での障害者支援の実態と障害者アスリートによる社会貢献の可能性についてコメントと質問があり、各パネリストからの発表をさらに掘り下げる内容で具体的な意見交換が成された。フロアからも各氏に質問が寄せられ、「いまスポーツに何ができるのか」、「今後何ができるのか」という本シンポテーマに迫る様々な視点とアイディアの交換があり大変有意義なセッションとなった。ディスカッション中にも今後の課題として繰り返し挙がっていたように、1995年の阪神大震災後も見られたように、震災から月日が経ち、街の復旧が進むとともにボランティア支援や注目度が減少することも懸念されている。指定討論者の山本氏のコメントの通り、スポーツに携わる研究者が一丸となり英知を結集させながら、スポーツを通じた継続的な支援活動の量と質の充実を目指すことが重要課題となる。限られた時間の中であったが、今回の分科会シンポジウムが、「スポーツはどのような社会的役割を求められているのか」というテーマについて改めて考える場となり、学術的支援のあり方について議論を本格的に始動するきっかけになれば幸いである。最後に、東日本大震災直後の大変な時期にもかかわらず、ご登壇の依頼を快諾して頂き、貴重な発表とコメントを頂いた5名の登壇者の先生方に心より御礼を申し上げたい。

体育社会学専門分科会研究委員会

長ヶ原 誠（神戸大学） 大沼義彦（北海道大学） 黒須 充（福島大学）
松尾哲也（立教大学） 北村尚浩（鹿屋体育大学）

日本体育学会 第62回大会 <鹿屋体育大学>

体育社会学専門分科会 シンポジウム採録

2012年（平成24年）3月19日 印刷

2012年（平成24年）3月22日 発行

編集者 長ヶ原誠（体育社会学専門分科会研究委員会委員長）

発行者 川西正志（体育社会学専門分科会会長）

発行所 日本体育学会 体育社会学専門分科会

事務局 〒610-0394 京都府京田辺市多々羅都谷 1-3

同志社大学スポーツ健康科学部 二宮浩彰 研究室内

Tel & Fax: 0774-65-7536

E-mail: hninomiya@mail.doshisha.ac.jp